機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ　Ω』

零月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ　Ω』

【Ｎコード】
Ｎ２２１４Ｂ

【作者名】
零月

【あらすじ】
けして語られる事のない…歴史の影に隠れたもう一つの『ガンダムＳＥＥＤ』の物語が今、語られる。これは…歴史の影に隠れた『Ω』の名を持つモビルスーツと一人のパイロット…そして、その仲間達の物語

PHASE－00『プロローグ』

C．E．（コズミック・イラ）70。
人類が生活空間と資源・エネルギー開発を宇宙に求めるようになった時代『C．E．（コズミック・イラ）』遺伝子操作によって高い知能と身体能力を持った人々『コーディネイター』生まれはその数を増やしていった。遺伝子操作を受けていない人々『ナチュラル』の中には『コーディネイター』のことを快く思わない者も少なくなかった。

数において不利なコーディネイターたちは地球各地で迫害を受けるようになっていた。

地球の国々はC．E．50年代からコーディネイターを中心として巨大人工衛星都市「プラント」を建設、コーディネイターの多くはプラントに住むようになる。

この「プラント」はエネルギー問題で悩む地球に豊富な宇宙資源から得られたエネルギーや無重力を生かした工業生産物を地球に供給する役割を担っていた。

その利益はオーナー国が独占していた。オーナー国は自らの支配を確固たるものとするため、プラントに武器と食料の生産を禁止した。

いわれのない支配と搾取…当然プラント側はこれに反発、独立と対等貿易を地球側に求めた。

幾度と無く話し合いの場が持たれたが、話し合いはそのたびに決裂に終わり、地球・プラント間の緊張は徐々に高まっていった。

そして…C．E．７０年2月１４日悲劇は起こる
期を焦った地球軍はプラントの一つ『ユニウス・セブン』に対し核攻撃を強行したのである。この攻撃により『ユニウス・セブン』は破壊された。この悲劇一血のバレンタイン一により地球・プラント間の緊張は一気に本格的武力衝突に突入した。数で勝る地球連合の勝利という当初の予測は、ザフトが投入した核反応を抑制するだけでなく電波通信やレーダー波を阻害する『ニュートロン・ジャマー』と機動兵器『ＭＳ（モビルスーツ）』によって裏切られた。そして、戦局は疲弊し１１ヶ月という月日が過ぎた。

だが…そんな事は何一つ気にしていない者がそこにはいた…

『エースパイロット』…そう呼ばれる者は存在している…歴史の影の中に消えた『ナチュラル』でありながらその操縦技術から傭兵部隊に所属している敵味方から『白き翼』と呼ばれ恐れられるほどのパイロット…これはそんな彼の物語

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ－Ω』

これは『Ω』の名を持つモビルスーツと『白き翼』と呼ばれたパイロットの物語

ＰＨＡＳＥ－００『プロローグ』（後書き）

次回予告…存在を抹消させられた『６番目』の『Ω』の名を持つ『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』と『白き翼』と呼ばれるパイロットが出会った時、語られる事のない歴史が動き出す…。次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－０１『Ωの名を持つガンダム』。もう一つの歴史を切り開け、ガンダム！

ＰＨＡＳＥ－０１『Ωの名を持つＧ（ガンダム）』

「ちっ…。」

白く塗られたカスタムタイプのジンが三機のノーマルタイプのジンと戦っていた

「…ザフトの補給基地の破壊…。楽な仕事と思っていたが…これじゃあ割に合わない仕事だな…。」

その三機との戦闘前にすでに二機のジンを倒していた…そのために残りのバッテリーと弾丸も切れ掛かっていた…パイロットの技術もなかなかだったので…敵の機体があと一機でも多かったら危なかったと思っていた直後の三機のジンの増援…それは明らかに彼を不利にしていた

「この！」

自分を追いかけてきた敵の中で先行している一機に気が付くと素早く腰に装備されている重斬刀で敵のコックピットを貫くと敵の推進剤が攻撃した際に発生した火花に引火して、重斬刀を持った白いジンの左腕を巻き込んで爆発した

「ちっ…これでもう接近戦は無理だな…。こっちの武器の残りは弾切れ寸前のライフルだけか…。重くなるからって言わないでもう少し、武器を持って来るべきだったな…。」

『後悔先に立たず』…そんな、小さい頃に誰かに聞いた自身の生まれ故郷の言葉を思い出していた

…紹介が遅れていたが…彼の名は『伊達　翔』…傭兵部隊『シャイニングウィング』に所属しているパイロット…ナチュラルでありながら、モビルスーツを高い技術で操れる事と白いモビルスーツを操る事から『白き翼』とも呼ばれている

「しまった！」

考えに意識を奪われていた事で一瞬だけ、出来たスキに敵のジンのライフルの弾丸が翔の乗る白いジンの推進剤を撃ち抜いた

「まずい！」

爆発する前にコックピットのハッチを空けて、翔が白いジンの中から出た瞬間、白いジンの推進剤が爆発した

「うわ！！！」

翔は幸運にも爆発に飲み込まれずには済んだが…そのまま機体の爆発の衝撃に吹き飛ばされた

「はぁ…こんな事なら、翼が盗んだ地球軍のデータから作ったって言う新型の四機のどれか…乗ってくるんだったかな…。」

爆発の衝撃で吹き飛ばされて、宇宙を漂流しているというのに翔にはまだ余裕が有るようにそう呟く

なお、正確には製造元の上層部を極秘情報で脅して予備のパーツ一式を要求し、改造と組み立てを行った物である

「…モビルスーツ無しで基地も落せそうにないし…補給基地とか言ってもまだモビルスーツは残っているだろうし適当に何か奪って…。ん？」

翔は偶然にも地球軍のマークの入ったコンテナを見つけた

「コンテナ？　サイズから考えるとＭＡ（モビルアーマー）くらいなら有りそうだな。」

コンテナの中にあるのがモビルスーツより性能の劣るモビルアーマーでもこのままの状態で宇宙を漂流しているよりはいいと思った翔はコンテナに近づいていった

宇宙を漂流していたコンテナは何かの衝撃で人が一人入れるだけの隙間が開いていた

「敵の戦力に関しては運が無かったが…。運がいいな…中に入れそうだ。」

そんな事を考えながら、コンテナの中に入った瞬間、翔は一瞬だけ言葉を失ってしまった

「…モビルスーツ…。地球軍の…モビルスーツだって！？」

自分が入ったコンテナは地球軍の物だったのはず…それなのにコンテナの中に有ったのはモビルスーツだった…それもザフト軍で使用されている『ジン』とは明らかに形の違う機体、特にその頭部の二本のアンテナと二つのメインカメラがジンとの違いを主張している背中には蒼い大型の剣の様な武器と緑色の大砲を装備している事が確認できる…その機体の実物は見た事の無い…それでも、それは一度だけ見た記憶のあるモビルスーツに似ていた

「翼の情報に有った『ヘリオポリス』で開発されていた地球軍のモビルスーツ…翼の奴が名前と外見だけしかデータを盗めなかった５機目、確か『ストライク』とか言う名前だったか…。」

それでも…今、自分の目の前にその機体が存在している事はおかしい事にすぐに気が付いた…地球軍のモビルスーツ…『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』の機体は四機がザフト軍に奪われて、残る一機は強襲機動特装艦『アークエンジェル』と共に地球軍の軍事衛星『アルテミス』に向かっていると言う情報があったはずだから…自分の目の前に有るのがその機体がそれであると言う考えはすぐに否定できた

「六番目の機体か…。」

様々な状況証拠から翔はそう言う考えに行き着いた

地球軍の新型…自分が今まで愛用していた白いジンを失った事を多少、不運に思っていたが…新型のモビルスーツが手に入った事に対する幸運を感じながら、翔はコックピットの中に入った

持っていたライトの明かりを頼りに近くに有ったマニュアルに視線を向けてそれを読むと自分が探していた文章を見つけた

「システムの立ち上げはこれか…。」

翔がボタンを押すと計器類に光が灯り、そのモビルスーツのＯＳが機動する

『Ｇｅｎｅｒａｌ
Ｕｎｉｌａｔｅｒａｌ
Ｎｅｕｒｏ－Ｌｉｎｋ
Ｄｉｓｐｅｒｓｉｖｅ
Ａｕｔｏｎｏｍｉｃ
Ｍａｎｅｕｖｅｒ』

「ガンダムか…いい名前だ。」

『Ｇ．Ｕ．Ｎ．Ｄ．Ａ．Ｍ』…ＯＳの紅く輝く頭文字を続けてそう読むと嬉しそうな表情を浮かべた

機体のＯＳが起動するとメインカメラに光が灯って、視界が開けた

「この機体の名前は…。［ＧＡＴ－Ｘ０００（トリプル・ゼロ）オメガ］か…。武装は…。贅沢な機体だな…。」

自分が考えていた以上に…口に出すのもイヤになる様な豪華な武装に呆れながらバッテリーと武装を調べていた

バッテリーの残量には問題ない…武装も全て装備されていて、問題は無い…すぐにでも実戦に出しても問題の無い機体だった

「って、機体はすごいがＯＳはダメだな…まともに動く様に持ち帰って直してもらうか…。」

自分が今まで使っていた機体に比べて、お粗末なＯＳに武装の時とは違う意味で呆れながら、機体を動かすとコンテナを無理矢理開いて、翔の駆る新型モビルスーツ『オメガ』は宇宙にその着色されていない鋼色の鈍く光る姿を現した

宇宙に出た瞬間、オメガのレーダーにすぐ二つの反応があった

「ちっ…あの補給基地の護衛の残りか…。機体を撃破したんだから、諦めろよな…。」

自分を探している敵だと言うことに気が付くとすぐにマニュアルの続きに目を通していく…コックピットの中から脱出した瞬間を見られていた事に失敗したと判断しながら、自分を探している二機のジンのパイロットに対する文句を言いながら、そのマニュアルに従って操作を続けるとオメガの装甲が鈍く輝く鋼色から鮮やかなトリコロールカラーに変わった

「さあ…来い…。」

オメガに装備されている３２０ミリ超高インパルス砲『アグニ』の照準を合わせながら、二機のジンを一撃で撃破できるタイミングを待っていた

「今だ！？」

オメガに装備された３２０ミリ超高インパルス砲『アグニ』から撃ち出された閃光が同時に二機のジンを飲み込むとそのまま『アグニ』の閃光に飲み込まれたジンは爆発して散っていった

「…って、おいおい……なんて破壊力だ！？　機体に装備された武器でこの攻撃力！？　なんでこんな機体が…コンテナの中で…放置されていたんだ！？　…まあ、任務はこの機体じゃ無理そうだな…一度、戻った方がいいか…。」

自分の手に入れた機体の力に驚きながら、そのまま自分の所属している傭兵部隊の仲間との合流ポイントに向かって行った

飛び去っていくオメガの姿を二機のモビルスーツが確認していた

「オメガ…あの機体を回収するために邪魔な基地の破壊を傭兵部隊『シャイニングウィング』に依頼していたが…。」

「まさか…彼があの機体を手に入れるとは…計算外でしたね…。」

「…［ＧＡＴ－Ｘ０００（トリプル・ゼロ）］…『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』の六機目…破棄される前に手に入れ様とザフトの仕業に見せかけて輸送機を撃墜したまでは良かったがな…。」

二機の黒い機体はそのままその宙域から離脱して行った

これが『白き翼』の名を持ったパイロット『伊達　翔』とその愛機
となる『Ωの名を持つG(ガンダム)』の…運命の出会いだった

ＰＨＡＳＥ－０１『Ωの名を持つＧ（ガンダム）』（後書き）

次回予告…依頼された場所にオメガと共に向かう翔、そこで翔を待っていたのは破壊された基地と二機の漆黒のＭＳ（モビルスーツ）だった。翔の記憶の中に現れる友人からの最後の依頼。次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－０２『漆黒の悪魔』。漆黒の闇を切り裂け、ガンダム！

ＰＨＡＳＥ－０２『漆黒の悪魔』

オメガのコックピットの中に有るキーボードを一人の青年が操作している

「ニューラルランゲージ・ネットワーク再構築。フィードフォワード制御再起動、伝達関数コリオリ偏差修正、運動ルーチン接続、システムオンライン……。」

そう呟きながらキーボードを操作していく

「終りだ。」

オメガのコックピットからその青年が顔を出すとオメガの足元に立っていた翔が視線を向けた

「ああ、これでやっとオメガをまともに動かせるな…。」

オメガのコックピットの中にあったマニュアルに視線を向けながら、翔は翼の言葉に答えた

「ああ、まるでデータの中に有った［ＧＡＴ－Ｘ１０５］ストライクの『ストライカーパック』と言う武器『ソード』と『ランチャー』の同時装備だな…。それでも、ストライクとは違い、換装は不可能…癖が強すぎて扱いにくい…。完全にお前の専用機だな。」

「確かに…癖を覚えれば後は楽だ。どこをどう動かせばどう動くのか分かれば簡単だろう…モビルスーツの操縦なんて？」

簡単に言い切る翔に呆れた視線を向けながら、翼は口を開いた

「…それはお前だけだろう…普通では出来んぞ…？　これでナチュラルなんていうんだから…世の中、間違っているな。」

翔は翼に視線を向けると

「翼…『現実を直視できない人間に成長は無い』じゃ無かったのか？」

「お前が特殊すぎるだけだ。…コーディネイターのオレでも尊敬できるぞ。」

「まあ…人間は慣れる生き物だろう。」

「…お前は特別だ。」

そう言うと翼はオメガに視線を向けた

「翔…新しい機体の調整も終わった事だ…。もう一度、仕事に行って来い。」

「ああ、分かってる。」

翔の乗ったオメガはそのまま宇宙に飛び出していく

『う・・うわぁぁぁぁぁ！！！』

ジンが巨大な鋏を持ったモビルスーツに引き千切られていく

『な・・なんだ！？』

もう一機のモビルスーツの伸びた両腕から伸びるビームの刃がジンの装甲を引き裂いていく

『あ・・悪魔だ…。』

二機の漆黒のモビルスーツによって、基地を守っていたモビルスーツは残骸にその姿を変えていく

その二機のモビルスーツの姿は一言で例えるならば…『悪魔』としか言い様がない姿だった

「さーて…お前達のおかげで折角の『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』のロストナンバーの回収がダメになったんだ…その腹いせだ。精々楽しませてもらうぞ…。」

両腕から伸びるビームの刃を消して、腕が元に戻ると背中に有る八枚の翼を広げて、その体が上下に伸びると巨大なビーム砲が現れた

「消えろ。」

モビルスーツの腹部から現れた巨大なビーム砲から撃ち出された閃光に補給基地は飲み込まれていく

「くっくっくっ…なかなかいい破壊力だな…。この機体…『ＧＡＴ

ーXナンバーシリーズ』の新型…。」

蟹の様な巨大な鋏を持ったモビルスーツのパイロットからの通信がディアブロのコックピットに届いた

『ぼくのファブニールもいい機体ですよ…力だけなら、『GATーXナンバーシリーズ』の中でも最強の機体ですからね。』

「まあ、これでロストナンバーの回収が出来なかった事に対する気も済んだし…あのバカに対する演技も出来た。」

その言葉を聞くとファブニールのパイロットは笑い出した

『ホント、バカじゃなかったら、愚かですね。自分より優れた物を認めないなんて…あれじゃあ、子供の方が大人ですよ。』

「くっくっくっ…。まあ、バカと鋏は使い様だ…オレの目的の為に利用させてもらう。」

ディアブロの腹部に有る内蔵型580ミリ複列位相エネルギー砲『ニーベルン』から撃ち出されたビームに飲み込まれて焼き尽くされたザフトの補給基地を眺めながら、ディアブロとファブニールのパイロットは楽しそうな会話を続けていた

「本部で話したらダメですよ、聞かれたらただじゃすまないんですから。」

「クックックッ…だが…あのバカの話を聞いていると笑わずにはいられなくなるぞ…。」

「人格的な面では圧倒的に前・盟主の方が上でしたからね。前・盟主がコーディネイターに対して好意的じゃなかったら、一生、あんな立場にはなれませんよ、あの人は…。」

自分達が全滅させた基地を眺めながら、談笑を続ける二機のモビルスーツのパイロットは自分達に近づいてくる一機のモビルスーツの反応に気が付いた

「…来た様だな…失われた『六番目』の『G』が…。」

「ですね…彼らへの依頼…キャンセルしなくて良かったですね…オメガを呼び出すエサになって…。『ロストナンバー』…『オメガ』…ぼく達の邪魔になる前に破壊するまでです…。」

二機のモビルスーツが補給基地を襲っていた時から、数分ほど時間は戻る…ザフトの補給基地に向かう『オメガ』のコックピットの中

「…いい機体だな…『OS』の書き換えが終わってまともに動く様になったから、よく分かる。」

それでも、翔の心には一つの不安があった…オメガに装備されている主力兵器『アグニ』と『シュベルトゲベール』の二つ…オメガに装備されている武器の中で『アグニ』は遠距離戦の…『シュベルトゲベール』は接近戦の要ともいえる武器だが…単体で使った場合は強力な二つの武器も同時に装備されたオメガには一撃一撃に消費す

るエネルギーが多すぎる

「比較的消費の少ない『シュベルトゲベール』はともかく…『アグニ』の連射は一瞬でエネルギー切れだな…。」

マニュアルの中にあったオメガの武装のデータを思い出しながら、翔の駆るオメガは目的の場所に向かっていた

『翔…お前に依頼が有る。もし、オレが死んでこの組織が暴走したら…お前が『ブルーコスモス』を止めてくれ…。』

翔の頭の中に傭兵部隊『シャイニングウィング』を結成する以前、まだ単独で活動していたころに受けた依頼の事が浮んできた

「…■■さん…言葉通り現・盟主『ムルタ・アズラエル』は暴走を始めた…。オレが知っている…あなたが盟主だったころの『ブルーコスモス』と今のブルーコスモスは違いすぎる。オメガの…『ガンダム』の力があれば…あなたとの依頼…守る事が出来る…のか？」

そんな事を考えながら、目的の場所に着いた瞬間、オメガのモニターを通して、翔の視界の中に飛び込んできたのは…廃墟となった補給基地と…そこを守っていたモビルスーツの残骸だった

「な！？　なにがあったんだ？」

周りにある残骸は何かに押しつぶされた様なジンとビームサーベル

の様な物で切り裂かれたジン…『ビームサーベル』…翔が知る限り…モビルスーツでそれを装備されているのは『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』の機体だけ…高出力のビーム兵器で焼かれた補給基地…翔の頭の中に嫌な考えが出来上がってきた

「…まさか…地球軍…それも『ブルーコスモス』直属の…。」

自分の頭の中にそれが浮かんだ瞬間、オメガの通信に何者かが割り込んできた

『ご名答。』

それが聞えた瞬間、オメガのレーダーに反応が現れると翔はオメガをそっちに向けた

「な！？　…悪魔…。」

自分の視界の中に飛び込んだ二機のモビルスーツを見た瞬間、翔の口から出た答えはそれだった

「［ＧＡＴ－Ｘ０００（トリプル・ゼロ）］…オメガ…オレ達の手に入らないのなら…破壊するまで。まあ、売ってくれるならそれ相応の金額も支払うが…どうする？」

悪魔の翼を持ったモビルスーツ『ディアブロ』のパイロットが言った瞬間、翔の駆るオメガは『シュベルトゲベール』を手に持った

「それ金額は『命』とでも言うんだろう？　お断りだ。」

翔がそう言った瞬間、通信から笑い声が聞えてきた

『クックックッ…。確かに…。そうそう一応、名乗っておこうかな…？　オレは地球軍特殊部隊『ディアボリックフォース』の隊長タツヤ。』

『同じく…ブルーコスモス特殊部隊『ディアボリックフォース』の刃。』

二機の悪魔の名を持つモビルスーツと『白き翼』の駆る『ガンダム』との戦いが始まる

ＰＨＡＳＥ－０２『漆黒の悪魔』（後書き）

次回予告…オメガと翔の前に立ち塞がる二機の漆黒のモビルスーツ、ディアブロとファブニール、二機の悪魔と激突するオメガだが二機にコンビネーションの前に追い詰められる。次回、次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－０３『悪魔との激突』。悪魔との戦い…生き抜け、ガンダム！

ＰＨＡＳＥ－０３『悪魔との激突』

「消えてもらうぞ…オメガ！！！」

ディアブロを駆るタツヤの叫び声が響くと翔の駆るオメガの目の前にいる二機の黒いモビルスーツが動き出した

「くっ！」

相手の動きに気が付いて『シュベルトゲベール』を向けた瞬間、ディアブロの両腕が伸びてその先から短い光の刃が伸びた『ビームクロー』…遠距離の戦いを最も得意とするディアブロの接近戦での最大の武器…それがオメガに向かって行く

「ちぃ！」

ディアブロのビームクローを避けた瞬間、上空に移動していたファブニールがブースターの中に収納されている圧斬鋏『ギガンティック』をオメガに向かって伸ばした

「なに！？」

突然、機体の動きが止まった事でオメガの足が『ギガンティック』に捕獲されている事に気が付くと『ギガンティク』に向かって『シュベルトゲベール』を振り下ろした

「残念ですけど…パワーならこっちの方が上なんですよ。」

ファフニールを駆る刃の言葉が響いた瞬間、もう一つの『ギガンテ

ィック』が『シュベルトゲベール』を振り下ろそうとしたオメガの腕を受け止めていた

「くっ…力はオメガ以上か…。」

それでも、今の一瞬からファブニールの動きから、相手の能力を推測するとオメガのもう一つの武器３２０ミリ超高インパルス砲『アグニ』をファブニールに向けた

「ＰＳ（フェイズシフト）装甲でも…この一撃なら。」

オメガに装備された『アグニ』から撃ち出された閃光がファブニールに向かって行く

「くっ。」

オメガを捕獲していた『ギガンティック』を外すとファフニールは『アグニ』の一撃を避けた

「いい判断ですね…。ビーム兵器ならＰＳ（フェイズシフト）装甲にも一撃でダメージを与える事が出来る。流石は『白き翼』…。」

『ギガンティック』で捕獲していたオメガを放さなければアグニは避けられない…アグニを避けなければその一撃はファブニールに直撃していた

「それでも、『アグニ』はオメガの装備の中で最もエネルギーを消費する武器…あれはストライカーパック『ランチャーストライク』に装備されているオリジナルと同等の破壊力を持っている…武器自身の破壊力…それが地球軍で作られた時点での『オメガ』の弱点だ。

」

『ストライク』は『ストライカーパック』の換装によって、バッテリーを取り替える事が出来る…それに対して、『オメガ』にはストライカーパックは無い

武器自身の破壊力でエネルギーを消費しやすいと言う弱点は翔自身理解していた…それでも、オメガの『ＯＳ』を書き換えた後、任務の続きを行なう為、すぐに出て来た翔にはそれを補うための時間が今の翔にはなかった

（…弱点は奴らも知っていると言う事か…だったら…狙うのは！）

『シュベルトゲベール』を背中に戻すと素早く方に装備されたビームブーメラン『マイダスメッサー』をファブニールに向かって投げた

「そんな物に当たるとでも…。」

ファブニールが自分に向かってきた『マイダスメッサー』を避けた瞬間、オメガは次に行動に移っていた

「思ってないぜ。」

戻ってきた『マイダスメッサー』を受け止めると素早くロケットアンカー内臓小型シールド『パンツァーアイゼン』からロケットアンカーを撃ちだした…通常、それが装備されている『ソードストライク』はアンカーで相手を捕獲後、『シュベルトゲベール』で切り裂くと言う攻撃が基本となるが…それがオメガだと大きく違ってくる

オメガは相手を自分の元に引き寄せると同時に相手に近づき…『ア

グニ』を相手に向けた

「な！？」

『ソード』に装備されている『パンツァーアイゼン』で相手を捕獲後、『ランチャー』に装備されている『アグニ』で打ち抜く…二つの『ストライカーパック』の力を持たないストライクには不可能なオメガにだけが可能な単純だが…ある意味、強力な連続攻撃だった

「堕ちろ！！！」

アグニがファブニールに向かって撃ち出された瞬間、もう一機存在していた『ディアブロ』がビームクローをオメガに向かって振り下ろした

「ちぃ！」

オメガがディアブロの攻撃を避けた瞬間、捕獲していたファブニールは逃れて、モビルアーマー形態に変形した

「なに！？」

モビルアーマーに変形したファブニールの上にディアブロが乗るとディアブロの背中にある八枚の翼が広がると体が上下に伸びて、本体の中に収納されている巨大なビーム砲が現れた

「…『ニーベルン』の閃光の中に消えろ。」

「な！？」

ディアブロの体から撃ち出された『アグニ』以上の破壊力を持った『ニーベルン』の閃光がオメガに向かって打ち出されるとオメガは真上に跳んでそれを避けた

「終わりだ。」

その行動を知っていたようにディアブロは真上に飛ぶとオメガに向かって右腕のビームクローを振り下ろした

「させるか！」

自分に向かって振り下ろされたビームクローを『シュベルトゲベール』で受け止めると肩に装備されている『コンボウェポンシステム』の１２０ミリ対艦バルカン砲と３５０ミリガンランチャーを撃ちだした

「な！？」

予想していなかったオメガからの反撃にディアブロは直撃を受けたが…ＰＳ（フェイズシフト）装甲に対してはそれほど効果的なダメージを与える事は出来なかった

「くっ…。」

その攻撃でディアブロが動きを止めた瞬間、ディアブロの装甲が黒から鋼色に変わった…フェイズシフトダウン…装甲の色が鋼色に変わると言う事はＰＳ（フェイズシフト）装甲の効果が失われた事を意味している

『アグニ』以上の破壊力を持った『ニーベルン』…単体では一発が限界だが…『ファブニール』から電力の供給を受けた事で二度目の

発射が可能となっていた…それでも、ビームクローに使用するエネルギーの消費とオメガからの反撃…それを受けた事でディアブロからＰＳ（フェイズシフト）装甲の与える闇が奪われると同時にビームクローも消える

「くっ…フェイズシフトダウンか…。」

「終わりだ！！！」

ディアブロのコックピットの中でタツヤが言った瞬間、翔の駆るオメガはＰＳ（フェイズシフト）装甲の与える闇を失ったディアブロに対してその手に握る『シュベルトゲベール』でトドメの一撃を振り下ろす瞬間

『させませんよ。』

オメガの振り下ろした『シュベルトゲベール』がディアブロを切り裂こうとした瞬間、ファブニールのギガンティックがディアブロを捕獲して、その場所から退避して行く

それでも、ファブニールの捕獲が遅れた一瞬で翔の駆るオメガの振り下ろした『シュベルトゲベール』はディアブロの右腕と四枚の翼を切り裂いていた

「くっ…。オメガのパイロット…シャイニングウィングの『伊達翔』とか言ったな…その名前、この屈辱…貴様を殺すまで永遠に忘れない！！！」

ファブニールに捕獲されて飛び去っていくディアブロのコックピットの中でタツヤはそういい残していった

「逃げられたか…。」

翔は逃げていく二機のモビルスーツを黙って見送って行った…機体性能とパイロットの能力がほぼ互角…二対一と言う数の上での不利…相手は翔の乗る機体の事をなぜか知り尽くしている…そんな条件の中の不利な戦いを終わらせた翔は自分の機体の状態を確かめていた

翔が自分の乗る機体の状態を確かめている途中、オメガの体からトリコロールカラーが消えて、鋼色に変わった

「…敵の姿も確認できない…他に敵が現れないとも考えられない…このままで戻るか…。」

翔が予想していた通り今のオメガには逃げて行った相手を追っていけるだけの余裕は残されていなかった…機体へのダメージは少なかったものの『アグニ』と『シュベルトゲベール』…この二つの使用で消費したエネルギーの残量と機体の受けたダメージ…その二つが翔から二機を追いかけていくだけの余裕を完全に奪っていた…帰還中、敵に襲われたら、逃げ切れるのか…今のオメガのエネルギーの残量はその判断も難しい状態だった

翔自身、『PS（フェイズシフト）装甲』が効力を失っている状態で敵が不意打ちをして来ても簡単に避けられると言う自信が有るが…

「…『ディアボリックフォース』にデータに無い新型（モビルスーツ）か、一度、詳しく調べた方が言いか…。」

二機のモビルスーツが逃げていく方向に背中を向けて、オメガは自分の来た場所に戻っていく

…『コズミック・イラ（C．E．）70』…漆黒の悪魔達を駆る悪魔の軍（ディアボリックフォース）とΩの名を持つ機体を駆る『白き翼』の戦い…歴史の影で起こる物語は…動き始めていく

ＰＨＡＳＥ－０３『悪魔との激突』（後書き）

次回予告…悪魔の軍が新たに動き出したころ…シャイニングウイングの船では四つの新たな力が目覚めようとしていた。悪魔の騎士の企みとは…？　次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－０４『天空の狩人』。汝の敵…撃ち抜け、ガンダム！

ＰＨＡＳＥ－０４『天空の狩人』

宇宙空間…青く塗装されて、二つの大砲を持った機体が目の前に有るターゲットに大型のビーム砲を向けていた

『ターゲットロック。』

大型のビーム砲、ランチャーストライクやオメガにも装備されている『アグニ』の閃光が目の前に有るターゲットを飲み込んで消滅させていく

「…よし…いい動きだ…アグニの調整も完璧、オレのスナイパーバスターの性能は万全だな…。」

『スナイパーバスターガンダム』…翼が地球軍から盗んだ新開発のモビルスーツのデータとモルゲンレーテから貰ったパーツを元にして自分専用に作り出した新型のモビルスーツ…『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』の中では盗めなかったのは…奇しくも唯一ザフトに奪われなかったストライクのデータだけだった…それでも、ストライクの兄弟機となる『ＧＡＴ－Ｘ０００（トリプル・ゼロ）オメガ』を偶然にも翔が手に入れた事から、翔達、シャイニングウィングはある意味、地球軍の新型を全て手に入れていると言ってもいい

事実、翔がオメガを操って、ザフト補給基地跡でディアブロとファブニールと戦った後に何度か海賊が『オメガ』を狙って襲ってきたが…翔の『オメガ』、炎の『グラップラーデュエル』、翼の『スナイパーバスター』の三機で追い返していたから、襲って来ようと考えるバカも少なくなっていた

「最大射程の確認も出来た…あとは…実際に動く的を相手に試して見たい装備が有るが…。」

翼は不気味な笑いを浮かべた

「…また襲ってこないかな…海賊(バカ)が…。」

襲ってくるな…絶対に生きては帰れないぞ…（汗）

そんな事を考えながらスナイパーバスターはアグニの一撃で的を撃ち抜いていった…スナイパーバスターのコックピットの中で翼が意味深な笑みを浮かべていた事は…神のみぞ知る

「さて…戻るとするか…。」

そういい残すと翼を乗せたS(スナイパー)バスターは彼ら『シャインニングウィング』が利用している輸送船に戻っていく

幸か不幸か…翼の企み通り『シャイニングウィング』の新型モビル

スーツを狙う『愚か者』は存在していた…『天空の狩人』の生贄となる自分達の未来も知らずに…

地球軍の戦艦三隻…その中の1隻の艦橋に有るモニターに『シャイニングウィング』の輸送船が映し出されていた

「あれがこちらのモビルスーツのデータと破棄される予定だった『ロストナンバー』を乗せた船か…。」

確認を取るように自分の隣にいる青年に言った

「はい…先日、ぼく等が回収しようとした『ロストナンバー』を偶然、拾った者があの船に乗っています。それにその後の調査で他の『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』の四機、そのデータを盗み出した者も関係者にいるという事が分かっています。まあ、ナチュラルもいますが…コーディネイターに味方する者等、敵とみなしていいでしょう…。ザフトに奪われている四機のデータと『ロストナンバー』…それを回収する事はプラスになると思いますよ。」

その表情に笑顔を浮かべると青年は扉を開けて艦橋から出て行った

「それでは…ボクはファブニールで戻らせていただきます…それと上の方から『ディアボリックフォース』はみなさんに協力する様に言われているので…。」

その青年…『刃』は艦橋から出ると周囲に誰もいない事を確認して、通信機に視線を向けた

「こちら、刃…。タツヤさん…作戦通り、アズラエルの息のかかった艦隊を『シャイニングウィング』に向かわせました…。一応、軍の機密情報を盗み出したと言う事で動かす理由も有りますし…。」

『分かった。事は全て計画通りだな…。』

その返事が返ってくると通信が切れた

ブルーコスモス特殊部隊『ディアボリックフォース』…強化ナチュラル（ブーステッドマン）の最高傑作であるタツヤを筆頭とした特殊部隊…表向きでは地球連合軍のエリート部隊とされていて、唯一モビルスーツを配属された部隊として現在の地球連合軍最強の部隊となっている。そして、タツヤが表向きアズラエルに忠誠を誓っている様に見せているために高い権力を与えられている。

そんなディアボリックフォースの中で刃だけはその性格から他の部隊に対しても評判はいい…それは強化の結果『怒り』と言う感情が希薄になり、『悲しみ』と言う感情が無くなった事でその分だけ『喜』『楽』の感情を強くなっている事がその性格の元になっているのだが

…余談はこの辺で…刃はファブニールのコックピットの中で待機していた…最悪の場合、オメガの相手はファブニールでするしかない…戦艦に搭載されている機体は地球軍の量産型ＭＡ『メビウス』だけ…現在、オメガと戦うことの出来るモビルスーツは刃の愛機『ファブニール』だけだ

それでも、メビウスは十機以上も用意されているが…オメガの戦力

を考えれば無いような物だという考えにたどり着いていた…それを考えて、タツヤは刃とファブニールを待機させていた

「…量産機のジンでさえメビウス五機分の戦闘力…それが新型…ぼく達の二機とも互角に渡り合った機体…。まあ、輸送船ならメビウスでも十分でしょうけど…。」

それでも、刃の頭の中には一つの不安があった…

「…『天空の狩人』と『爆炎の闘士』…彼らを見たと言う噂を聞いたのですが…。」

かつて、ザフトで最強と歌われていた二人のパイロット…それが敵になっていると考えると戦力不足としかいえなかった

「…戦闘データを元に作られたデータ収集用のストライクのコピーは受け取っていますけど…パイロットがいませんね…。まあ、向こうには何機動かせるモビルスーツが有るのかは不明ですからね…。」

そう言いながら刃は真上に視線を向けた

「…動かせない機体はどんな高性能機でも人型の棺桶ですからね…。…ザフトの方に情報を流しておく事にしましょう…それに…彼らの目的地は『ヘリオポリス』…今は廃墟となったコロニー…そこでしょうからね…。」

そんな事を考えながら、刃はその表情に笑みを浮かべた

「…さて…彼らには『シャイニングウィング』の戦力を調べる為に役立っていただきますか…。」

心優しい笑顔で酷い事を簡単に言い切る刃…人、それを『捨て駒』と言う

「…まあ、助っ人も用意して差し上げますが…。」

さて…『天空の狩人』が求めている『生贄』と刃の考えている『捨て駒』が決まった時、『シャイニングウィング』のメンバーが集まっている輸送船では…

青く塗られて、アグニを装備した『バスター』…翼専用に改造されたバスターの改良型『スナイパーバスター』のコックピットから降りると翼は翔に視線を向けた

「オレのスナイパーの調子は好調…お前のオメガも次の仕事には使えそうだな。」

「ああ、それで…頼んでおいた事と、他の『グラップラー』『シャドーエッジ』『セイバー』の三機の調子はどうだ？」

翔の言葉を聞くと翼は視線を真上に向けて、言葉を続けていく

「…『グラップラーデュエル』は完璧だ。残りの『ブリッツシャドーエッジ』と『セイバーイージス』の二機はパイロットがまだ戻ってきていない…。それと…頼まれていた様にＯＳは調整していたが…。」

翔は翼の言葉を聞くと今、他の仕事に出ている二人のパイロットの事が頭の中に浮かんで来た、それと同時に翼の質問を消すように

「…クウヤと鋼矢か…どの機体に乗せるんだ？」

「ああ、クウヤを『セイバーイージス』に…鋼矢には『ブリッツシャドーエッジ』に乗ってもらう予定だ。」

翼の言葉を聞いて、翔は鈍色の二機のモビルスーツに視線を向けた

「…パイロットがいなければ…折角の高性能機もただの人型の棺だな…。」

「…誰も乗らないなら、ただの大きいだけの人型の置物だ。」

「…そっちの方が正しいな…。」

翼の言葉に同意すると翔は格納庫から立ち去っていく

「…ロストナンバー『オメガ』…地球軍のデータからも抹消されたモビルスーツか…無茶な武装の組み合わせで廃棄されたにしては…。オレが調べた所、問題は無かったが…他に何かあるのか…この機体には…？」

そういいながら、翼が見上げた先には…鈍色に染まっている『オメガ』の姿が有った

「…考えてみると…こんな無茶な機体を操れるのは翔だけだな…。…不思議な奴だ…。」

『シャイニングウィング』が出来る前、まだ翔達が個人で活動していた時、翼と炎も翔と敵同士として戦った事も有る…その時はまだ翔が『ナチュラル』である事も…今は自分達がこうして同じ傭兵部隊で活動している事も想像できなかった

「…まあ…オメガに何か秘密が有るとすればその内、分かる事だろう…。」

翼は自分の考えをまとめるとそのまま格納庫を立ち去っていく

「…バスターの新装備も試したいな…。このモビルスーツが作られたと言うヘリオポリス…次の仕事を請ける前に全員がそろったら、一度向かった方がいいか…ジャンク屋に荒らされている可能性も有るが…予備のパーツの残骸くらいなら残っている可能性も有るからな…それに…。」

翼の頭の中に『運が良かったら、海賊が襲ってくるかもな』等と言う恐ろしい考えがあった事は誰も知らないだろう…

ＰＨＡＳＥ－０４『天空の狩人』（後書き）

次回予告…シャイニングウィングの仲間の元へと届けられた漆黒のＭＳ（モビルスーツ）…力を渇望する彼が手にした力（モビルスーツ）が彼にもたらすのは、未来か？

それとも、滅びか？　次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－０５『黒の雷撃』！！！　その未来、掴み取れガンダム！！！

ＰＨＡＳＥ－０５『黒の雷撃』

一人の少年の目の前に鈍色の機体が有った…右腕にミサイルの様な武器とビームサーベル、ビームライフルが一体になった盾と左腕に大型のアンカーを装備した機体…ザフトに奪われた地球軍の五機の『Ｇ』の中の一機『ブリッツ』と呼ばれている機体…そのデータを元に『シャイニングウィング』で改良された機体の一機…『ブリッツシャドーエッジ』

「…これが地球軍で開発されて、ザフトに奪われたとか言うブリッツの改良機『ブリッツシャドーエッジ』か…。」

ＯＳは翼の手で改良された物と言う事を確認して、共に送られてきたマニュアルを読んでいるとその表情に笑みを浮かべた

「…『ミラージュコロイド』の改良型…攻撃時にも姿を消したままに出来る…武装も接近戦の物が基本…いい機体だ…。奇襲、接近戦が可能なオレの好みの機体だな…。」

『うれしそうですね、鋼矢さん。』

自分の後ろから聞こえてきた声に振り返ると鋼矢は口を開いた

「理奈か…。ああ、オレの得意な奇襲、接近戦と言った戦い方が最大限に活かせる機体だ…今まで使っていたジンもダメージが大きか

ったからな…知り合いのジャンク屋にでも引き取らせるか…誰も乗らない機体が有っても格納庫の場所を取るだけだ。」

鋼矢のパーソナルカラーの黒に塗られて、左肩に狼を描いたマーク、右肩に『シャイニングウィング』のマークである白い翼が描かれているジン…鋼矢が今まで操っていた機体を見上げた

「鋼矢さん、新しい機体…『ブリッツシャドーエッジ』でしたか…？　それに使える部品は残しておいた方がいいんじゃないですか？」

「…そうだな…パーツ事で売れば不要なパーツだけを処分できる。」

…『シャイニングウィング』のパイロットの一人『皇　鋼矢』…彼は機体に対する愛着と言った物に対して最も縁の無い人間だった

「それに…外見も気に入った…これから、世話になるぞ…オレの第二のパートナー…。」

鋼矢は小さな声でそう言った…彼には物に対する愛着と言う物は無い様に見えるが…違っていた…自分を助けてくれるものは大切に扱う…『ブリッツシャドーエッジ』との出会い…それが鋼矢と彼の愛機との出会いだった

今はまだ呼ばれてはいないが…その後、敵も味方もこの機体を駆る彼を恐れと言う感情を込めてこう呼ぶ事になる…『鋼鉄の亡霊（メタルファントム）』と…

そんな小さな鋼矢の言葉を聞き取ると立ち去って行く鋼矢に視線を向けて…ブリッツシャドーエッジを自分の視界の中に入れた

「…ブリッツさん…鋼矢さんを守ってあげてくださいね。」

微笑みながら理奈は自分の前に聳え立つ鈍色の機体にそう言った

鋼矢は天井に視線を向けながら、ブリッツシャドーエッジと共に翼から与えられた指示の内容を考えていた

（『ヘリオポリス』…ザフトの攻撃で破壊されたオーブのコロニーか…確か翼がデータを奪った際にそのコロニーで製造されたと教えられたが…。）

モビルスーツに使った材料や作り出すための施設…それをどうしたのかが心から気になる疑問だったが考えた瞬間、恐ろしくなったので…あまり気にしない事にした…

『天空の狩人』…モビルスーツ戦を得意としていなかった翼がそんな異名で呼ばれていたのは…数人の例外を除いて敵や味方を自分の戦略の中で完璧に踊らせる事が出来るという才能が元になっている…

「…深く考える事は止めよう…。」

翼の策略は戦場だけでものを言う物では無いと考えた瞬間…鋼矢が出した結論だった

鋼矢がそんな考えにたどり着いているころ…どんな所にも『バカ』と呼べる者達がいた

正確に言えば…それはその宙域で活動している海賊だったのだが…
『運悪く』鋼矢達の乗る小型輸送船を狙っていた

宇宙空間を飛ぶ鋼矢達の小型輸送船の様子を三機のジンが狙っていた

「へへ…いい所に現れたな…。」

「運の無い奴らだ。」

…ああ…最も運が無いのが自分達だという事を理解していない者達の不幸…

輸送船のコックピット…そこの操縦席に座る鋼矢とその隣のシートには理奈の姿があった

「鋼矢さん…翼さんからの通信は何だったんですか？」

「ああ。どうやって作ったのかは謎だが…翼が完成させた四機のモビルスーツ…オレに渡される予定だった機体『ブリッツシャドーエッジ』を受け取ったら、ヘリオポリスの跡で合流すると言う話だ。」

「ヘリオポリスですか…危険なんじゃ有りませんか？　確かザフトと連合の戦闘で破壊されたって言う話ですよ…。」

鋼矢は目の前に広がる宇宙空間に視線を向けるとすぐに口を開いた

「それに関しては問題ないだろう。ザフトと奴らはもう連合の戦艦を追いかけていったはずだ…そして、連合のモビルアーマー程度でモビルスーツに勝てる訳は無い。」

そのまま何かを考えるように黙っていると鋼矢はすぐに口を開いた

「まあ、オレ達を襲おうと考える『バカ』がいない限りは安全だろうな…。」

そう言った瞬間、鋼矢は何もない宇宙空間に視線を向けると立ち上がった

「理奈、操縦を代わってくれ…。」

鋼矢は呆れたような口調でそう言うと格納庫に向かって歩き出した

「どうしたんですか？」

「…バカが三匹…。」

それだけ言い残すと鋼矢はコックピットの中から立ち去っていく

「バカ…ですか…？　海賊ですね。」

鋼矢の言葉の意味を理解すると理奈は鋼矢に変わって操縦席に座った

「良かったですね…鋼矢さん…。」

…言い換えれば『不幸ですね、海賊さん達』と言っているに等しい理奈の言葉だった

ブリッツシャドーエッジのコックピットの中…鋼矢の姿はあった

「…ガンダムか…。」

ＯＳの頭文字を繋げて読んでいくと鋼矢の表情に一瞬だけ笑みが浮んだ

「…理奈…。」

コックピットの中にあるモニターに理奈の映像が写った

『はい、鋼矢さん。』

「離れる前に決着を着けるから心配しないで航行を続けていてくれ。」

『分かりました、食事の用意はしておきますか？　インスタントですけど…。』

「その前に終わる。ブリッツシャドーエッジ…『皇　鋼矢』出る！」

ブリッツシャドーエッジの体が漆黒に染まると宇宙に向かって飛び出していった瞬間、ブリッツシャドーエッジのボディーが鈍色に戻

ってそのまま姿を消していく

『ミラージュコロイド』…幻影の衣を身に纏って、漆黒のモビルスーツは宇宙に飛び出していく

「よし、行くぞ。」

ザン

ジンのパイロットがそう言った瞬間、ジンのマシンガンを持っていた腕が何かに切り裂かれていた

「な・・なんだ?」

前方の空間が歪むとそこに漆黒のモビルスーツが姿を現した

「モ・・モビルスーツだと!?」

「そんな…レーダーに反応なんて…。」

突然、現れたブリッツシャドーエッジに対して混乱した瞬間、鋼矢は敵に視線を向けた…残されている敵は片腕になったジンが一機…残っている二機のジンが動き出す前にブリッツシャドーエッジはトリケロスに装備されているビームサーベルを伸ばした

「……。」

ブリッツシャドーエッジの振ったビームサーベルの一閃を海賊の乗っていたジンは後ろに跳んで避けるとマシンガンをブリッツシャドーエッジに向けた

「ど・・どこからあらわれたんだ！？」

「落ちろ！」

直撃する事を確信していたビームサーベルの一撃を避けられたブリッツシャドーエッジはジンの撃ち出すマシンガンの直撃を受けた

「トドメだ！」

もう一機のジンが撃ち出した六発のミサイルがブリッツシャドーエッジに直撃して爆発を起した

「へへ…新型でもこれだけ…。」

「ああ…原型が無くなってもパーツくらいは…。」

その攻撃だけで倒せたと思っていた海賊達に対して…一閃、ミサイルの起した爆煙の中から飛び出したブリッツシャドーエッジのトリケロスから伸びる閃光の刃『ビームサーベル』がジンの頭部と右腕を切り裂くとすぐに残っているジンにトリケロスを向けた

「二つ。…あれだけ直撃しても無傷か…ＰＳ（フェイズシフト）装甲…これがあれば実弾に対する防御は完璧だな…。」

最後まで生き残っていた海賊の乗るジンがマシンガンをブリッツシャドーエッジに向けていた…中に乗るパイロットは…全ての攻撃が直撃しても無傷で目の前に存在しているブリッツシャドーエッジに対して恐怖していた…

「ウ・・ウソだろう…こっちの攻撃は全部…直撃しているはずだろう…？　な・・なんで無傷なんだよ！？」

恐怖に震えながら…海賊の乗るジンは無意味にマシンガンを乱射していた…そのマシンガンを避けようとせずにブリッツシャドーエッジはジンに向かって行く

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！！」

ブリッツシャドーエッジはマシンガンの直撃のダメージを受けずに海賊の乗るジンに向かって行く

「これで…。」

トリケロスに装備されたビームサーベルがマシンガンを持った右腕を切り裂くとビームライフルから撃ち出された閃光がジンの頭部と左腕を打ち抜いた…三機目のジンが戦闘不能になった事を確認すると最初に腕を切り裂いたジンにグレイプニールを向けた

「最後だ。」

頭部をグレイプニールで打ち抜くとブリッツシャドーエッジはトリケロスのビームライフルを向けた

「ふっ…少しは戦えたようだが…オレの敵ではなかったか…。」

向けていたトリケロスを降ろすとブリッツシャドーエッジは戦闘不能になった三機のジンに背中を向けた

「…トドメはエネルギーのムダだな…。」

一瞬で決着を付けると再び幻影の衣を身に纏いブリッツシャドーエッジは宇宙の闇の中に姿を消していく

「…な・・なんだったんだ…今のは…？」

「ゆ・・幽霊でも見たのか…オレ達は…？」

「も・・モビルスーツの幽霊…？　…そうだ…オレ達は…幽霊を見たんだ…直撃していたはずだ！？　幽霊じゃないなら…なんで…？」

反撃してもその全てが無駄に終わった事とPS（フェイズシフト）装甲の事、そしてミラージュコロイドの事を知らなかった事で鋼矢に全滅させられた海賊達は幽霊でも見た様な表情だった…

輸送船の格納庫に着くと鋼矢はブリッツシャドーエッジから降りて、コックピットに戻ってきた

「お帰りなさい、鋼矢さん。」

「ああ、予想通り大した時間は掛からなかったな…。理奈、翔達との合流予定地点までの時間は…？」

理奈と操縦席のシートを変わると鋼矢はその事を確認した

「あと、一時間ほどですね。」

「…予定時間より少し遅れるな…。」

「じゃあ、海賊さん達に襲われたとでも言えばいいんじゃないですか？」

「…二十分程度の遅刻ならな…。」

『鋼鉄（メタル）の亡霊（ファントム）』…『皇　鋼矢』…非公式ながら、この戦いが『鋼鉄（メタル）の亡霊（ファントム）』の初陣だった

ＰＨＡＳＥ－０５『黒の雷撃』（後書き）

次回予告…一つは王道、一つは王道でない…二つの正史の序曲を飾った崩壊した大地に異聞録を彩る者達（メインキャスト）が集う。彼等の会合はこの物語に何を告げるのか？次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－０６『ターニングポイント』！！！　物語の序曲、舞えガンダム！！！

PHASE－06『ターニングポイント』

ザフト軍ナスカ級高速戦闘艦『キングダム』…ザフト軍特殊部隊『ロートリッター』に与えられたナスカ級高速戦闘艦…それは廃墟となった『ヘリオポリス』の前に有った

その『キングダム』の一室…三人の人影が有った

「…『ヘリオポリス』…地球軍のモビルスーツを作ったと言う中立国『オーブ』のコロニーか…。」

エリートの証である赤いザフトの軍服を着た三人…彼らが『ロートリッター』のメンバーとなっている

「ラザ、でも…あのコロニーのモビルスーツの四機はクルーゼ隊が奪取、残る一機は地球軍の戦艦と共にここから離れたんじゃないのか？」

ラザと呼ばれた青年は自分に話しかけてきた青年に冷たい視線を向けると口を開いた

「ところが上の奴らはそう思っていなそうだ…実際、『足つき』が離れた後、例の五機以外の色の違う同型の二機のモビルスーツが目撃されたらしい…。面倒だが、オレ達の任務はここの調査だ。」

アキラと呼ばれた青年の隣に立っていた髪の長い少女は何かを考えると口を開いていく

「あの地球軍の戦艦…地球軍から盗み出した情報だと…『アークエ

ンジェル』って、言うみたいよ。」

「…『大天使』か…。地球軍もいい名前をつける物だな…まあ、大天使を追う悪魔の役は趣味の悪い仮面好きの部隊に任せればいいか…。」

『フッ。』

ラザはその言葉を聞くと冷たい笑いをその表情に浮かべていた

「大天使名を持つ戦艦か…オレが沈めたいな…。まあ、神などと言うこの世で最も価値のない存在の使いの名前を持つ戦艦などオレの敵じゃない…。」

笑いを浮かべながらそう言うラザに対してアキラはため息をつくと自分の隣に立っている少女に視線を向けた

「まあ、オレ達は…趣味は悪いけど腕は確かな変態(クルーゼ)仮面が苦戦している戦艦とモビルスーツの相手はいやだな…ミク。」

「そうだね、私達はその任務に回されなくて良かったね、アキラ。」

ラザは話している2人に視線を向けると隣を通り過ぎてドアから外に出て行く

「アキラ、ミク…ムダ話はその位にしておけ…任務だ。」

ラザがそう言い残して出て行くとアキラとミクの2人も表情を変えた

「「了解。」」
先に出て行ったラザにそう答えるとアキラとミクの2人も部屋の中から出て行く

「ラザ＝ランフォード…クリムゾンシグー、出る。」

「霧崎　アキラ…シグー、出るぞ。」

「水月　ミク…ジン・スナイパー、行きます。」

紅、白、青…専用のカラーに塗られた三機のモビルスーツが彼らの母艦『キングダム』から出撃していく

戦艦『キングダム』からラザ達『ロートリッター』のモビルスーツが出撃した時から数分前…『シャイニングウィング』の輸送船

蒼いイージスがＭＡ形態からモビルスーツの姿に戻ると輸送船の格納庫に戻っていく

「さすが、翼さんが改良した機体ですね。ジンとは比べ物にならない性能ですよ。」

蒼いイージスのパイロットはコックピットから降りると格納庫に立っていた翼に話しかけた

「そうか、鋼矢と炎も満足したようだ…。まあ、セイバーイージスはオメガが無かったら翔の機体になる予定だったが…お前の方が向いているようだな。」

そこまで言った後、翼は表情に笑みを浮かべた

「それに元々、ザフトで多く量産されているジンとは大きな性能差がある機体だ。性能的にはシグーが相手でも勝てるな…。まあ…セイバーイージスはお前の専用機だ、大事にしろよ…クウヤ。」

「はい。」

クウヤが翼の言葉にそう答えるとブリッジに向かって歩き出した

『シャイニングウィング』の輸送船…『ホワイトウィング』のブリッジ…そこにパイロットで有る翔達五人を含めて…シャイニングウィングのメンバー七人が集まっていた

「みんな…今回は仕事とは無関係…まあ、ジャンク屋みたいな事をさせる訳だが…データはオレがハッキングした時にストライク以外は全て回収済み…それに向こうもバカじゃないだろうからデータは期待できない…。地球軍の『モビルスーツ』のパーツ…それを優先的に回収してくれ。」

翼の言葉を聞くと炎が口を開いた

「それをオレ達で回収するのか…？」

「正確には、翔、クウヤ、鋼矢の三人…。オレと炎は艦の護衛だ。海賊が襲ってきた場合の護衛が必要だからな…。」

そこまで言った後…翔は口を開いた

「…海賊じゃなくて、地球軍とザフトの連中が襲ってきたりしてな…。」

翼はその言葉を聞くと表情に笑みを浮かべた

「問題ない…『爆炎の闘士』と『天空の狩人』が護衛するんだからな…。」

「そうだったな。」

翼の言葉に翔が答えると翼はブリッジから見える宇宙に視線を向けた

「そろそろヘリオポリス跡だ…。油断するなよ。」

「「「「了解。」」」」

翼の言葉に他の四人が声をそろえて答えると五人はブリッジから出て格納庫に向かって行った

『…皇　鋼矢…ブリッツシャドーエッジ…行くぞ。』

『『風見　クウヤ』、セイバーイージス行きます！』

『『大道寺　炎』、グラップラーデュエル、出るぜ！』

『…『羽柴　翼』、スナイパーバスター…出撃する。』

『伊達　翔…オメガ、行くぞ。』

輸送船『ホワイトウィング』から五機のモビルスーツが出撃するとその中のグラップラーデュエルとスナイパーバスターだけが輸送船『ホワイトウィング』の近くに残って、出撃した『オメガ』『セイバーイージス』『ブリッツシャドーエッジ』の三機を見送った

「レーダーに反応…。」

彼専用の白いシグーに乗っているアキラがレーダーに出た反応に視線を向けるとモビルスーツの反応が三つ…自分達に近づいてきていることに気が付いた

「三つ…地球軍の偵察機か…？」

「待って、アキラ…スピードが違う…それにこの反応はモビルスーツ…。」

ミクはレーダーに映し出されている反応を確認しながらそう言葉を続けた

2人の会話を聞いていたラザはその言葉を聞くと口を開いた

「…モビルスーツ…この近くに友軍はいなかったはずだ…まあいい…任務の邪魔になるようなら、排除するだけだ。」

そういい残すとラザの駆るクリムゾンシグーは反応の有った場所に向かって飛び去っていった

「お・・おい、ラザ！　…はぁ…。ミク、戦闘になった場合、援護は任せた…。」

「うん。」

アキラの乗るシグーとミクの乗るジン・スナイパーもラザのクリムゾンシグーの向かって行った方向に消えて行った

「レーダーに反応…？」

翔がレーダーにモビルスーツの反応が有った事に気付くと同じ様に

気が付いた鋼矢とクウヤの2人も動きを止めた

「三つ…また海賊か？」

レーダーに視線を向けながら、セイバーイージスに乗るクウヤが言うと翔はレーダーに反応が有った場所に視線を向けた

「違うみたいだ…二機はシグーのカスタム機…海賊や傭兵の装備にしては高級すぎるぞ…。」

「シグーは赤と白か…。赤はオレが行くぞ。」

鋼矢がそういい残すとブリッツシャドーエッジの姿は幻影の衣に包まれて宇宙の闇の中に消えて行った

「クウヤ、援護は任せた…最悪の場合、翼達に応援を頼む…。」

翔のオメガは対艦刀『シュベルトゲベール』を手に取ると白いシグーに向かって行った

「…オレは2人の援護か…一応、翼さん達に知らせに行った方がいいな…。」

クウヤがそう判断するとセイバーイージスはMAに姿を変えて輸送船に戻って行った

（それに…なんだ…この嫌な感覚は…？『あいつ』が近くにいるみたいだ…。）

『不安』と『悪寒』…その二つがクウヤの心を支配していた…

「…アキト…。」

その二つが示している相手の名前を呼ぶとクウヤは手に力を加えた

「あの機体…三機ともデータに有った連合のモビルスーツ…敵か…。」

…連合の新型…やっぱり、ただの傭兵がそんな物に乗っている訳が無いと判断されてしまった様だ…翔達がアキラ達をザフトだと判断したのは正しかったが…それとは反対に翔達は間違われてしまった様だった

「連合のモビルスーツ…ストライクに似た機体か…面白い…。」

アキラの乗るシグーはビームサーベルを抜いて、オメガに向かって行く

「来たか。」

シグーが自分に向ってきた事を確認するとシュベルトゲベールで自分に向かって振り下ろされたビームサーベルを受け止めた

「ちっ。」

「ビームサーベル!?　さすが…ザフト…技術力なら連合以上か…もうビーム兵器を装備した機体が有るなんてな…。」

オメガとシグー…二機のモビルスーツは一度、相手から離れるとオメガはアグニをシグーはビームライフルを相手に向けた

（…ちっ…敵の武装はビームライフル…エネルギーの消費が大きく、連射の効かないアグニだと不利だな…。だが破壊力ならこっちの方が…。）

（敵の装備はデータに有った武器か…しかも、接近戦用の装備も同時に装備している…でも…遠距離なら連射が可能なビームライフルの方が…。）

ビームライフルを連射するシグーに対してオメガはアグニを向けながら、相手のスキを狙っていた…一撃の破壊力…オメガに装備されているアグニの破壊力なら、翔は一撃でシグーを撃墜する事が出来ると考えていた…

それに対してアキラの乗るシグーはビームライフルを連射していた…破壊力で劣る分、ビームライフルは連射が可能になる…接近戦では不利と判断したアキラは遠距離での戦いで決着を付ける事を狙っていた

（反撃するヒマを与えないか…あのパイロット…並の実力じゃないな…。）

（こっちの攻撃が向こうには全部回避されてる…ムダ弾は撃たずにチャンスを見て反撃を狙っていると言う事か…。）

一瞬の攻防で相手の実力を判断すると二人のパイロットは目の前の機体に乗る相手を睨んでいた

（（…あいつ…強いな。））

ラザの乗るクリムゾンシグーは二機のモビルスーツに視線を向けながら、宇宙空間で立ち止まっていた…レーダーに反応の有った三機の内の一機は突然、反応が消えて…もう一機はこの場所から離れて行って…残る一機はアキラと戦闘中…今のラザは反応が消えた機体に注意を向けていた

「…ミラージュコロイドか…。」

姿を消してレーダーの反応も消した相手が次はどんな行動を取るのか…ラザはそれを推測していた

「…当然…こうなるな…。」

クリムゾンシグーが後ろに動くと今までクリムゾンシグーがいた場所の延長線上にあった隕石が何かに砕かれた

「ちっ…。」

隕石を砕いた何かが戻っていくと空間が歪んで一機の黒いモビルスーツ…『ブリッツシャドーエッジ』がその姿を現した

「オレの動きが読まれていたという事か…。」

姿を消して気付かれる前に一撃で相手を倒す鋼矢とブリッツシャド

ーエッジの戦い方…不意打ちとしては最高のタイミングで行なった一撃がラザには簡単に回避されていた

『クリムゾンギルティー（真紅の絶望）』…彼に与えられた異名…それは…実戦の経験の差以外ではあの『ラウ・ル・クルーゼ』と同等の能力を持っているとも言われている事の正しさを証明していた…事実、ラザは一度、クルーゼ隊に配属になりそうだったが本人の意思でそれを拒否していた…本人はその理由を語ろうとしないが

「予想通り…姿を消しての不意打ち…有効的な戦い方だな…。」

ブリッツシャドーエッジの撃ち出したグレイプニールがブリッツシャドーエッジの腕に戻るとトリケロスからビームサーベルの光の刃を伸ばした

「あの不意打ちが回避された以上、ミラージュコロイドは意味が無いな…だったら…。」

トリケロスからビームサーベルの刃を伸ばして向かってくるブリッツシャドーエッジに視線を向けるとラザは

「接近戦が望みか…オレもその方が戦いやすい…。」

鋼矢のブリッツシャドーエッジの一撃をラザの乗るクリムゾンシグーはビームサーベルを抜いて受け止めた

「接近戦でのシャドーエッジの攻撃力…甘く見るな…。」

「接近戦の攻撃力は相手の方が上か…面白い。」

クリムゾンシグーはブリッツシャドーエッジから離れるとビームライフルを向けた

ブリッツシャドーエッジの撃つランサーダートがクリムゾンシグーのビームライフルに撃ち落され、爆発するとその爆煙の中からブリッツシャドーエッジはクリムゾンシグーに向かって行く

「終わりだ！」

ブリッツシャドーエッジの一撃はクリムゾンシグーの持っていたビームライフルを切り裂いた

「ちっ。」

クリムゾンシグーは切り裂かれたビームライフルから手を離すとビームサーベルを抜いて、ブリッツシャドーエッジに向かって振り下ろした

「くっ。」

ブリッツシャドーエッジは素早くその一撃を受け止めた

「「ん？」」

丁度、2人はレーダーに有った反応に気が付いた

オメガは相手のビームを回避すると素早く肩に装備されたビームブーメラン『マイダスメッサー』を手にとってシグーに向かって投げた

「っと…危な…なに！？」

オメガの腕に装備された『パンツァーアイゼン』のアンカーがシグーのビームライフルを持った右腕を捕獲していた

「こっちが本命だ。」

背中に装備されているシュベルトゲベールを抜いて、翔の駆るオメガはブースターを全開にしてシグーに近づいていく

「こいつ！！！」

アキラの駆るシグーはシュバルトゲベールを避けた物のその一撃で左腕を切りかれていた

左腕を失いながらもアキラの駆るシグーは今まで使っていたビームライフルを投げ捨てると腰に装備されているビームサーベルを抜いて、シュベルトゲベールを握っていたオメガの腕を切り裂いた

「油断したか…。ん？」

「あいつ…強いな…。ん？」

2人はレーダーに新しい反応が現れた事に気がついた

「地球軍の戦艦…それも三隻も！？」

「お前達…地球軍じゃなかったのか！？」

アキラからの通信に気が付くと小モニターに映し出されているアキラに向って翔は口を開いた

「…オレは『シャイングウィング』の傭兵だ…地球軍じゃない…。」

「そうか…お前が『白き翼』なんだろう？」

「有名になったな…オレも…。」

「知ってるよ、ナチュラルなのに高いモビルスーツの操縦技術…白い機体を愛用する最強のナチュラル…有名だぜ。しかも同じ部隊には『天空の狩人』と『爆炎の闘士』がいると言う話だからな…。」

「それで…あの戦艦はオレ達とは関係ないぞ…。オレ達の機体は地球軍のモビルスーツのデータから作った機体だから予備のパーツが残っていればと思ってここに来たんだ…。」

「ああ…そうみたいだな…それにラザ達の方も気が付いた様だ。」

ロートリッターとシャイニングウィングの戦闘を目撃していて…今まで漁夫の利を狙っていた地球軍の戦艦では…

「ふふふ…我々の新型のデータを元に作り出した機体とロストナンバー…そして、ザフトのビーム兵器の実験機か…運がいいな…あのデータを持ち帰れば私の地位も…。ディアボリックフォースのあの男に感謝するべきだな。」

その部隊の指揮官は表情に笑みを浮かべると自分の部下に指示を与える

地球軍の戦艦から無数のメビウスが出撃していく中…黒く塗られたその機体が出撃しようとしていた…地球軍の主力兵器であるモビルアーマー『メビウス』とは明らかに違う外見をしたその機体は…

（…くっくっくっ…この戦場にいるのか…クウヤ！）

『メビウス・ゼロ…『風見　アキト』出るぞ！！！』

色はオレンジからディアボリックフォースのカラーである漆黒に塗られてはいるが…あの『エンディミリオンの鷹』と呼ばれている『

ムウ・ラ・フラガ』の愛機『メビウス・ゼロ』と同じ機体が戦艦から出撃していく

「メビウス・ゼロか…。他の機体だけでも数の上で不利だというのに…機体のダメージを考えると辛い相手だ…。」

アキラは自分達に向かってくる機体に視線を向けると何かを思い出したように言葉を加えていく

「ミクの奴…何をやっているんだ…？」

『酷いよ、アキラ～…。私の事、無視して勝手に戦ってたのアキラなのに…。』

恨めしそうな声がアキラのシグーに帰ってきた

「わ・・悪かった…。」

『酷いよ、アキラ。』

「……。今度の休暇…何か奢るから、許してくれ…。」

その言葉を聞いて嬉しそうに答える少女の声をシグーからの通信で聞きながら、翔は呆れたような視線をアキラの乗るシグーに向けて

いた

「…そう言うのは後にして目の前の現実に目を向けてくれ…。」

「分かってる…早く謝っておかないとミクの奴…許すどころか援護もしてもらえそうもなかったからな…。」

2人は敵が向かってきているというのにのんきにそんな事を話していると後方から二筋の光がメビウスの群を吹き飛ばした

『ザコでも数が多いと油断できないな…。』

『アキラ、約束忘れないでよ。』

オメガには翼からの通信が…シグーにはミクからの通信が届いていた

オメガとシグーの後方にはスカイブルーと白に塗られている翼のスナイパーバスターがアグニを…青く塗られているジン…ジン・スナイパーが大型のビームライフルをメビウス部隊に向けていた

『翔、それから…もう一人のシグーのパイロット…その状態で戦う気か？バッテリーも少ないだろうから下がっていろ…。』

翼からの一言が響くと翔とアキラはその言葉に納得してその場所から下がっていく…それを逃さないようにメビウス達がオメガとシグーに対して攻撃しようとした瞬間、次々に爆発していく

「そら、そら、そら！！！」

赤く塗られたデュエル…炎の愛機『グラップラーデュエル』のビームライフルがメビウスを撃ち落していく…

「へへ…『爆炎の闘士』…。」

ビームライフルを投げ捨てると素早く背中に装備されている二本のビームサーベルを抜いた

「…『大道寺　炎』様…見参！！！」

炎の乗るグラップラーデュエルの振るに二本のメビウスは次々に切り裂かれていく…メビウスも反撃しているが実弾兵器を無効にするＰＳ（フェイズシフト）装甲の前に実弾兵器しかないメビウスの武装では自分達の群の中に飛び込んで大暴れしているグラップラーデュエルに対してダメージを与える事が出来なかった

「オラ、オラ、オラ！！！　ザコども、どこからでも来い！！！一機残らず叩き落してやる！！！」

二本のビームサーベルとシールドによって全て叩き落されているメビウス…暴れているような戦い方でコックピットに当てた物が一つも無いのは凄いが

「ふふふ…地球軍が相手か…面白い狩りになりそうだな…。『天空の狩人』の力…見せてやろう…。」

スナイパーバスターのアグニとビームライフルが炎の乗るグラップ

ラーデュエルから離れたメビウスを撃ち落した

「…逃げられると思うな…このオレの狩場に入った限り…。」

グラップラーデュエルの射程範囲の外にいるメビウスがスナイパーバスターのアグニの光に飲み込まれて行った

「くっ…たった一機のモビルスーツに何をしている！！！　メビウス・ゼロはどうなった！！！」

地球軍の部隊の指揮官の怒鳴り声が響いていた時…アキトの駆るメビウス・ゼロは…

「この感じ…アキト、お前か！？」

クウヤの乗るセイバーイージスの撃つビームライフルを避けながら、黒いメビウス・ゼロはガンバレルを二つ、本体から分離させた

「見つけたぞ…クウヤ！！！」

ガンバレルからの攻撃を避けながら、クウヤはセイバーイージスをＭＡに変形させて、メビウス・ゼロから距離を取っていく

「アキト…お前だけはオレが倒す！！！」

ＭＡに変形したセイバーイージスからスキュラが撃ち出されるとアキトの乗るメビウス・ゼロはそれを避けて、二つのガンバレルでセイバーイージスを狙った

「終わりだ。」

「バカが。」

モビルスーツに戻ると両腕のクローから伸ばしたビームサーベルを振ってガンバレルを切り裂いて、メビウス・ゼロの本体に向かって行く

「な！？」

「アキト…お前との因縁…これで終わりにしてやる！？」

メビウス・ゼロのコックピットにビームサーベルが振り下ろされようとした瞬間、セイバーイージスを衝撃が襲った

「うわ！？」

分離させていたガンバレルの一つをセイバーイージスに叩きつけて

いた…それがビーム兵器以外は効果の無いＰＳ装甲に対して普通に攻撃しても止められないと判断したアキトの取った行動だった

「くっ…アキト…。」

メビウス・ゼロはセイバーイージスから離れると相手に叩き付けたガンバレルをそのまま直接攻撃用の武器として使って攻撃していた

「ＰＳ装甲…ダメージは無効でも衝撃だけは届くだろう。」

ガンバレルをそのまま武器として使う…簡単には想像できない発想だった…ビーム兵器以外は効果の無いＰＳ装甲でも衝撃だけはセイバーイージスの中に届くはずと判断したアキトの選択だった

メビウス・ゼロに残されている三つのガンバレルが同時にメビウス・ゼロから離れるとその全てがセイバーイージスに向かって行く

「くらえ！！！」

三つのガンバレルが同時にセイバーイージスに向かって行く

「アキト…あの時の事は忘れない…お前だけはオレが…コロス…。」

両腕、両足からビームサーベルの光の刃を伸ばしてセイバーイージスは両腕と両足を振った

「なに！？」

一瞬で自分に叩き付けられる寸前の三つのガンバレルを切り裂くとセイバーイージスはＭＡに変形して、一気にメビウス・ゼロとの距

離を詰めていく

「おちろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉお！！！」

クウヤの叫び声と共に撃ち出されたセイバーイージスの必殺武器『スキュラ』の閃光がアキトの乗るメビウス・ゼロに向かって行く

「うわぁぁぁぁぁぁあ！！！」

セイバーイージスのスキュラの一撃を避けるとメビウス・ゼロはそこから逃げ出していく

「はぁ…はぁ…。アキト…。」

フェイズシフトダウン…最後のスキュラの一撃でエネルギーを使い果たしてモビルスーツに戻ったセイバーイージスが鈍色に戻った

「くっ…役立たずめ。」

「あ・・あの…。」

「なんだ？　…なに？」

恐怖に震える声で目の前を指差しているオペレーターの声を聞いて、指差す先に視線を向けた瞬間…その場にいた全員の視界の中に飛び込んできたのは…朱の絶望と玄の亡霊

「地球軍に情けをかける気は無い…死ね。」

「…残念ながら、お前で最後だ…。」

メビウスの部隊をグラップラーデュエルとジン・スナイパー、スナイパーバスターの三機に任せて、ラザのクリムゾンシグーと鋼矢のブリッツシャドーエッジは後方に控えていた地球軍の戦艦を撃墜していた

絶望と亡霊…その二機のモビルスーツから撃ち出された閃光が目の前に有る命を飲み込んでいった

「うわぁぁぁ…！！！」

クリムゾンシグーが艦首を失った戦艦から離れる前に撃ったビームが動力を撃ち抜くと戦艦は爆発に飲み込まれていった

「…ビームライフル…残していたのか…？」

「正確には予備を一つ装備させていただけだ…。」

「ちっ…。」

後に亡霊と呼ばれるパイロットと絶望と呼ばれているパイロット…彼らの中に今まで戦っていた目の前の相手に対しての憎しみは無かった…有ったのは…強敵との戦いが与えた戦士としての喜び…ただそれだけ…

戦闘終了後…ロートリッターの母艦『キングダム』からの通信が翔達シャイニングウィングの輸送船『ホワイトウィング』のモニターに映し出されていた

「いいのか…？」

翔の言葉にアキラは笑顔を浮かべながら答えた

『ああ…上には何も無かったって報告しておく…全て、クルーゼ隊の奴らが退却時に全て破壊したってな…。』

アキラの言葉が届くとロートリッターのメンバーを乗せた戦艦『キングダム』は飛び去っていく

「『また…戦場でな…。』」

2人の言葉が重なると通信は切れた

ロートリッターとシャイニングウィング…そして、ディアボリックナイツ…歴史の影で起こる…正史にも影響する戦いの舞台に上がる役者（勢力）…その三つまでがそこにそろった…そして…残された一つは…戦いの幕は上がっていく…

ＰＨＡＳＥ－０６『ターニングポイント』（後書き）

次回予告…戦争の序曲を告げた破壊の傷跡、デプリ海、ユニウス７…そして、それは翔にとっても、忘れえぬ場所であった。再会する友…そして、彼は己自身の過去と再会し、一人の少女と出会う。次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－０７『二つの再会と一つの出会い（前編）』！！！　逃れられぬ過去、立ち向かえガンダム！！！

PHASE－07『二つの再会と一つの出会い（前編）』

「はぁ…何でこんな所に…。」

デブリ海…宇宙を漂う漂流物の集まる場所…なぜ彼ら『シャイニングウィング』のメンバーがその場所にいるかと言うと…『仕事』…それが彼らがそこにいる事に対するただ一つの理由だった

「文句を言うな…オレ達の仕事は…地球軍からの依頼でこの近くでのザフトの行動の監視だ…。」

翔の乗るオメガの隣にいる翼のスナイパーバスターからの通信を聞くと翔は自分の近くを飛んでいる…二機のモビルスーツに視線を向けた

「…それはいいが…オレ達はいつから、副業で『ジャンク屋』を始めた？」

近くを飛んでいるジャンクを回収しているセイバーイージスとグラップラーデュエルの姿を見てため息をついた

『え？　前回は予備の部品だけしか手に入らなかったし…。』

『翔さん、最近…いい仕事、サーペントテールに持って行かれてるんですから…ジャンクを回収して、ジャンク屋を通して売れば生活費くらいには…。』

炎とクウヤからの返事を聞くと翔は言葉を続けていく

「…プライドは無いのか…お前ら…。」

『『それとこれとは話は別だ（ですよ）。』』

2人からの返事を聞くと翔は笑いを浮かべた

「その通りだ…プライドだけじゃ機体の整備も食事も出来ないからな。それに…戦争屋から物を取っても問題は無いだろう…ただし…。」

翔の言葉を聞くと他の三人も納得したように言葉を続ける

『分かってます…ここには誰も知り合いはいないけど…多くの人の眠る墓を荒らす気は有りませんから…。』

『ああ…誰が妹の墓を荒らせるか…。』

『花でも用意してくるんだったな…炎。』

『ああ。』

四機のモビルスーツの目の前に存在しているのは『ユニウス7』…この戦争の引き金となった『血のバレンタインの悲劇』が起こった…核攻撃を受けた場所

『ただ…アークエンジェルはここで略奪をしたみたいだけどな…。』

炎は廃墟となったコロニー『ユニウス7』に視線を向けながら吐き捨てるようにそう言った

「…正確には補給だ…向こうも生きるために必死なんだ…アルテミスでは補給も出来なかったようだからな…。」

翼の言葉を聞くと彼らの機体はその場所を離れていく

「それより…この近くでザフトの動き…アークエンジェルを追いかけている奴らじゃないのか…？」

「いや…依頼主の言葉を信じるなら…それとは別の奴らだ…。」

翼からの返事を聞くと翔はモニターの中に一機のモビルスーツを確認した

その機体の頭部にはザフトのモビルスーツに共通しているモノアイ

を持っているが明らかに今まで確認されているザフトの機体とは違う形をした機体…それが翔の乗るオメガのモニターには映し出されていた

翼はスナイパーバスターのコックピットから降りて宇宙を漂流していた機体に近づくとその機体のコックピットの中に入った

「新型の機動実験か…？　翼、お前がいたころにはザフトにこんな機体の開発計画はあったか？」

『イヤ…このゲイツとか言う機体はオレと炎が抜けた後…地球軍から入手したビーム兵器のデータを元に作られた機体の様だ…この機体の武装はロートリッターの機体と同じ物だな…。』

機体のデータを確認しながら、翼は言葉を続けて行く

『詳しい事は船に持ち帰って調べた方がいいな…それから…機体はデータによっては破棄した方が…何？　…バカが…こんな物を作りだしたなんて…ここまで愚かだったのか！？　ザフトの上層部の連中は…ユニウス7の犠牲から何も学ばなかったのか！？』

「どうしたんだ？」

怒りに表情を歪ませながら、翼は口を開いた

『Nジャマーキャンセラー…Nジャマーの影響下でも『核』が使える様になる物だ…そして…この機体は『それ』が搭載された実験機…コードネーム『ファイバード』…『不死鳥』なんて…随分な名前だな…こんな機体に…。』

翼の言葉を聞いた瞬間、ファイバードに視線を向けていた翔は表情を変えた

「待て…オレ達の今回の依頼人は…地球軍だぞ…こんな機体を持って行ったら…イヤ、この機体の事を報告しただけでも…。」

『地球にある核ミサイルは全てプラントに…これは元々向こうの技術で実用化するのはどちらが先なるかは分からないが…少なくても…今、地球軍に渡していい機体とデータじゃない事だけは確かだ…。』

「最悪だな…確か…神話の不死鳥が司るのは『再生』…でも、このファイバードは…。」

『人類を滅ぼすための炎を纏った…滅びの魔鳥か…。どうする…地球軍に届けるのは論外…誰かに回収される危険が有るから、ここに残して置く訳にも行かない…プラントに持って行っても秘密を知ったオレ達を生かしておくとは考えられない…。オレ達は疫病神を拾った様だな。』

翼はファイバードのコックピットの中から出るとスナイパーバスターのコックピットに戻るとファイバードの機体を受け止めた

『オレはこの機体を船に持ち帰る…拾ったジャンクの中に隠してから、ゆっくりこの機体の破棄の方法を考えた方が良さそうだな…。』

「そうだな…それにクウヤ達にもこの機体の事は教えた方がいい…この機体をどうするか考えるのはそれからだ。」

スナイパーバスターに支えられてパイロットのいないファイバードは運ばれて行った

飛び去って行く二機のモビルスーツを見送ると翔はオメガのレーダーに視線を向けて、レーダーに映し出される反応に気が付いた

「…レーダーに反応？　一機だけか…クウヤ達はジャンク集めの最中…翼はあの機体を船に運んでいる…オレが相手になるしかないか…。」

オメガの手に背中に装備されたシュバルトゲベールが握られるとオメガの頭部に有るメインカメラが自分達に近づいてくる一機のモビルスーツの姿をとらえた

「なに！？　…あれは…ファイバードと同型…ゲイツとか言うザフト初のビーム兵器装備の機体か…カラーは実験機…装備は…？」

ゲイツの装備している武装に視線を向けた瞬間、翔は一瞬だけ言葉

を失ってしまった

「ブ・・ブリッツのトリケロス…ランサーダートは無いけど…それとビームサーベル…映像だと…多分、あのビームサーベルはデュエルのだよな…。」

なぜか一人の人物が翔の頭の中に浮かんできた…ザフトの機体で…クルーゼ隊にあるはずの連合の『G』のブリッツとデュエルの武装を装備した機体…その事から翔は一人の人物が頭に浮んできた

『ふふふ…こんな所でストライクに出会えるとは…?』

モニターにその人物が映し出された瞬間、翔は呆れながら口を開いた…

「…そんな仮面つけて何やってんだ、浩平?　イヤ、それ以前にその仮面、どこで手に入れた!?」

モニターに映し出された仮面をつけた人物は翔の言葉を聞くと一瞬だけ視線を逸らした…仮面に隠されている表情は知る事が出来ないが…多分、その仮面に隠れているその人物の表情は動揺しているだろう

『な・・なにを言ってるんだ、翔よ…オレ…じゃなくて…私はザフトの『ラウ・ル・クルーゼ』…。』

本人はそうは言っているがかなり、動揺していて言葉もわずかに震

えている

「…お前がそれでいいなら、そう言う事にしておいてやろう…それで…なにしに来た…自称『ラウ・ル・クルーゼ』…。」

翔の言葉を聞くとモニターの中の自称『ラウ・ル・クルーゼ』は動揺しながら、言葉を続けていく

『…自称ではなく私は『ラウ・ル・クルーゼ』だ。』

「…お前、オレの名前呼んだだろう…初対面の相手なのに異名である『白き翼』では無く本名でな…オレにはザフトの仮面男に本名を教えるほど親しい知り合いはいないぞ…どう説明してくれるんだ…？」

モニターに映し出されている自称『ラウ・ル・クルーゼ』はため息をつくと翔に視線を向けた

『はぁ…見破られたか…。お前も面白みが無いな…。』

「浩平…お前は…『一応』、軍人だろう…。それで…その仮面はどこで手に入れた…それと…こんな所に何の用だ？」

一応の所を強調しながら言うと翔の言葉を聞くとモニターに映し出

されている『浩平』と呼んだ相手は仮面を外した

『ああ、仮面は前にこの機体の武器と一緒に補給が滞ったから食事と物資を頂こうとクルーゼ隊に忍び込んだ時にクルーゼから盗んだ。青い『デュエル』とか言う機体を持ち出そうとした時、銀髪のオカッパが邪魔したから殴って気絶させて簀巻きにして放置しておいた。』

（…本人のか、その仮面！？）

余談だが浩平が仮面を盗んだ後、クルーゼの部屋は徹底的に荒らされていたが金目の物は盗まれていなかった（犯人は当然、浩平です）…そして…気絶させられて簀巻きにされて格納庫に放置されていたイザークはその後、大騒ぎだった

『それと…ここに来たのは極秘任務でな…新型機に新しいシステムを搭載した機体が起動実験中に放置される事になって、そのモビルスーツの回収に…。』

目の前にいる機体のパイロットの言葉に二つの意味で驚きながら翔は口を開いた、そもそも極秘任務をペラペラと喋っていいのか？

「いいのか、そんな事喋って…。ちょっと待て、まさか…『Nジャマーキャンセラー』とか言うシステムを搭載したお前が乗っている機体の同系列の機体か？」

『ああ…知っているのか？』

浩平の返事を聞いた瞬間、翔の乗るオメガは背中に装備されているアグニを浩平の乗るゲイツに向けた

「お前…あれがどういう物か分かっているのか…？」

『核動力搭載の機体…そうだろう？　オレの部隊が何も知らないと思っていたみたいだけど全部知っていたんだよな…だから、その任務を受けるための交換条件に新型を寄越せって言ったんだ♪』

「浩平…あれはオレ達が回収した…でも…それをお前に渡すわけには行かない…。」

翔の言葉に笑みを浮かべると浩平の乗るゲイツは腕に装備されているトリケロスをオメガに向けた

『翔、お前は確か…今は傭兵だったな…今、あの機体を地球軍に渡す訳には行かない事くらいお前にも分かるだろう…♪』

「ああ…オレ達の立場でもその事は分かる…。それに今のオレ達の雇い主は地球軍だ。それに…『この場所』で…。」

『ああ…『この場所』だったな…オレ達2人だけが生き残った…場所は…。それとこれとは話は別だ…渡してもらうぜ…あのモビルスーツ…『ファイバード』をな！？』

浩平のゲイツは腕に装備されたトリケロスからビームサーベルを伸ばして、翔の駆るオメガに向かって行く

「ちっ！」

素早く背中に装備されたシュバルトゲベールを手に取ると翔の駆るオメガはゲイツのビームサーベルを受け止めた

「この場所で浩平…お前と戦う事になるなんてな！」

シュバルトゲベールでビームサーベルを受け止めながら、翔がそう言うとオメガはゲイツの体を蹴った

『ぐっ…。』

オメガから弾き飛ばされるとゲイツは体制を立て直して、ビームサーベルを取り出して閃光の刃を伸ばした…トリケロスからビームサーベルの光を消すとビームライフルを向けた

『オレも…こんな事になるなんて…思わなかったぜ！！！』

ゲイツに装備されたトリケロスのビームライフルから撃ち出された閃光がオメガに向かって行く

「ちっ！」

高出力のために撃ち合いになると相手のライフルに対しては連射の面で不利と考えた翔はオメガをゲイツの撃つビームライフルの閃光を避けながら接近していく

「接近戦ならこっちの方が上だ！」

『オレが盗み出したデュエルのビームサーベルとブリッツのトリケロスを甘く見るな！！！』

「盗品を自慢するな！！！」

翔の乗るオメガのシュバルトゲベールと浩平の乗るゲイツのビームサーベルが激突した瞬間、二機のモビルスーツ何かに気が付いた様に慌ててそこから離れた

オメガとゲイツが離れた瞬間、二機のモビルスーツの今まで存在していた場所に向かってビームの閃光が走っていった

「何だ…今のは…？」

その攻撃が自分の中までは無い事を今までの経験から導き出すとオメガのメインカメラをビームの向かってきた場所に向けた

『お前の仲間でも…無さそうだな…。』

浩平も翔の様子からそう考えるとゲイツのメインカメラをオメガの向けた場所と同じところに向けた

デプリベルトの中に存在していたのは…今までのモビルスーツとは系列が違う頭部を持ったモビルスーツの大群だった

「『なに…あれは！？』」

2人は声をそろえて叫んだ翔と浩平の2人には自分達を攻撃してきたモビルスーツには見覚えが有った

『モビルガイスト・ガスト』…クラスター計画の中で作られたモビルガイストの一種類であり、最も多く作られている量産型の機体…ザフトの量産機であるジンと変わらない時期に開発されていながら、ビーム兵器を装備している機体

「待て…あの機体は…あの時…オレが全部…破壊したはずだ…オレがこの手で…。」

『はは…久しぶりだな…翔。』

ガストの出現に混乱していた翔の意識の中に突然、そんな声が響いてきた…懐かしい声が…

「ま・・まさか…お前か…お前なのか…？」

無数のモビルガイスト・ガストの奥には一機のモビルスーツが存在していた…両腕には大型のシールドを装備して背中には大型のブースターを装備した機体…モビルガイスト『ブレイブ』が…

『モビルガイスト・ブレイブ…あの機体が…。翔、お前が破壊したはずじゃなかったのか！？』

「ああ…そのはずだ…それにあの時、起動状態に有ったのはオレの『アルフォース』と量産型の『ガスト』が数機だけだった…未完成のブレイブが完全な形でオレ達の目の前にいる事自体…おかしい！！！」

『それでも…現実に目の前に…。』

いるはずの無い金色のモビルガイスト『ブレイブ』のパイロットからの通信が届いた瞬間、翔と浩平を一つの感情が襲った『驚き』…それでも…彼らは頭のどこかでそれを当然とも考えていた

『久しぶりだな…翔、浩平…。』

「太一…生きていたのか…。」

全ての感情を押し殺した翔の声がオメガのコックピットの中に響いた

ＰＨＡＳＥ－０７『二つの再会と一つの出会い（前編）』（後書き）

次回予告…戦争の序曲を告げた破壊の傷跡、デプリ海、ユニウス７…そして、それは翔にとっても、忘れえぬ場所であった。再会する友…そして、彼は己自身の過去と再会し、一人の少女と出会う。次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－０８『二つの再会と一つの出会い（後編）』！！！　逃れられぬ過去、立ち向かえガンダム！！！

ＰＨＡＳＥ－０８『二つの再会と一つの出会い（後編）』

翔と浩平…オメガとゲイツのコックピットの中にあるモニターに映し出されている彼らの憎しみの対象ともいえる機体『モビルガイスト・ガスト』とそれを指揮する機体『モビルガイスト・ブレイブ』…全て破壊されているはずの『モビルガイスト』がなぜ存在しているのか…それは分からなかったが…唯一つ言えるのは…目の前に存在している機体は確実に翔と浩平に敵意を向けていると言う事だけだった

『…翔…。』

「ああ…。」

周囲を『モビルガイスト・ガスト』に囲まれている翔のオメガと浩平のゲイツ…二機のモビルスーツでどう戦うのか…いい考えは浮かんでこない

（あの時はオレの機体が最強の『モビルガイスト』…『アルフォース』だったから勝てた様なもの…完全に機体に助けられていた…今のオレは間違いなく以前より強くなっている…でも…。）

奥に立つ金色の機体が『モビルガイスト・ブレイブ』で有る事…翔の記憶の中では自分の乗っているオメガとクラスター用モビルガイストとの性能差は歴然…機体性能では間違いなく勝ち目は無い…そして…パイロットが自分と同じ『クラスター』である事…その事が身体能力の面での差をゼロに近くしている

『それで…パイロットの能力は互角、機体性能は向こうが上…どう戦う気なんだ…？』

オメガのコックピットの中にあるモニターに映し出されている浩平の声が響くと翔の意識は思考の中から現実に引き戻された

「お前の場合…身体能力は上でも機体性能の面で圧倒的に下だろう…。」

『確かに…お前だけが特別と思っていたけど…オレ達『クラスター』の生き残りの中で一人だけクラスター専用機に乗ったお前が言うなら間違いは無さそうだな。』

「そうだろうな…第一次、量産型の中で完成していた機体は事実上オレの『アルフォース』と『ガスト』が数機だけだ…。」

『オレの『アルファー』は完成もしていなかった…第二次計画の『ガルーダ』と『ユニコーン』は計画だけ…。もっとも、目の前にその完成しなかったはずの『ブレイブ』が存在しているぞ。』

2人はムダ話を続けながらも周りに対して気を抜いてはいなかった…周囲に存在しているガスト達には気を配っている…それが分かっているのか…ガスト達は自分達から向かってこようとはしなかった

「…浩平…お前の機体のエネルギー残量は…？」

『今までお前と戦ってたからな…かなり減ってる。』

「オレもだ…実弾は残っているけど…この数を相手に戦うのはハッキリ言って無理だ、逃げるしか無さそうだ…。」

翔と浩平の言葉が終わる時を待っていた様にガスト達は一斉に動き出してオメガとゲイツに向かって行く

「節約…出来そうに無いな！」

『同感だ！』

オメガの撃ち出したアグニの閃光が直線上にいたガストを飲み込んでゲイツの撃つトリケロスに装備されたビームライフルがガストの動力とコックピットを撃ち抜いていく

「まだまだ！！！」

オメガの振るうシュバルトゲベールの一閃がガスト達を切り払いゲイツの両腕にあるビームサーベルがガストの装甲を切り裂いていった

それでも、ガストの数は減る事はなく…次々と増援が集ってくる、倒せば倒すほど敵が増えていく様にも感じられる

「予想通り…研究所にあった自動工場がまだ生きているという事か…。」

『でも、一番大事な材料は…。』

「…ああ…量産機としてその点でのコストが多い事…それがガストが量産機に向かない理由だ…モビルガイストは数に限りの有る『それ』がなくなれば生産不能…。」

ビームサーベルを振るいビームライフルの閃光が舞う中…ガスト達

はオメガとゲイツを捕獲しようとする様に自分達からは遠距離攻撃を使おうとしてこない

…2人は大事な事を忘れていた…『ガスト』を…イヤ、『モビルガイスト』を作り出すのに一番重要な部品やその他の資源も周りに存在している…ただ…それは考えたくは無い事実であると同時に考えられない事ではなかった…ここに有る残骸の中にモビルガイストとの戦闘で破壊された物がないと言う事が翔達の考えたくない一つの事実を肯定している

それを考えると…『ガスト』は作成途中の物を含めればこの程度の数ではないという事に考えはたどり着くはずだが…2人は本能的な部分でそれを否定していた

『2人ともさすがだな…でも、そろそろエネルギーも無くなるだろう。』

ブレイブの通信から聞える聞き覚えのある声が攻撃してこないガスト達の行動の理由を教えていた

「!?　そうか!」

オメガがシュバルトゲベールの一閃でガスト達を薙ぎ払いアグニの閃光の中に飲み込んでいった後、翔が何かに気が付くように叫ぶと本体の色が消えて鮮やかなトリコロールカラーから鋼色に変わって行った…『フェイズシフトダウン』…連合製のオメガを含む八機の『ガンダム』の共通の弱点がここでオメガを襲った

「予備バッテリーに切り替え…。」

コックピットの中で翔が操作すると再びオメガの本体はトリコロールカラーに染まっていく

『予備のバッテリーか？』

浩平からの通信に気が付くと翔はすぐに気が付いた

「ああ、エネルギーの消費が激しい武器が多いから小型の予備バッテリーを二つ装備してある…。」

翔は口に出してはいないが『それでも、短時間しか戦えない』と言う事は浩平も確信していた…本来、予備バッテリーは武器専用のバッテリーにする予定だったがその調整のための時間がなく現在の形になっている…最終的には当初の予定通りに武器専用バッテリーにする予定だが…

『こっちもそろそろ戦闘不能だ。ビームライフルならあと4～5回は撃てるけどな…ビームサーベルは長時間の使用は無理だ。』

「アグニもそれくらいは撃てるけど…シュバルトゲベールを使った方がエネルギーの効率はいいな…。」

そう答えた後、翔はオメガのコックピットのモニターに写る浩平に視線を向けた

「浩平…。」

『ああ…位置の確認もできた…。』

オメガがアグニをガストの部隊に向けると翔はその引き金を引いたアグニの閃光に飲み込まれていく仲間を気にする様子も無く装備されたビームライフルを自分達の囲んでいる二機に向けた

「浩平！！！」

翔の叫び声が響くと浩平の乗るブースターを全開にしてゲイツはガストの群に向かって行く

『任せろ！』

突然、動き出したゲイツの行動に反応が遅れたガストを浩平のゲイツはビームサーベルの接近戦で引き裂いて行く

「脱出経路は確保…行くぜ。」

オメガのブースターの出力を上げるとシュバルトゲベールを手にとって加速して行く

「ルナティック（狂人の）！！！」

一瞬で加速してオメガはガストの群に向かって行く

「ライトニング（閃光）！！！」

高速で飛行するオメガを止めようとしたガスト達はオメガの前に立った瞬間、切り裂かれて行く

「…エネルギー不足だから不完全型でがまんしてくれ…ザコには勿体無い技だ。」

金色のモビルガイスト『ブレイブ』は飛び去って行くオメガを何も行動せずに見送って行く

『狂人（ルナティック）の閃光（ライトニング）…お前の必殺技…久しぶりに見せてもらったぜ・・・翔。まあ、不完全で残念だけどな…楽しみはこれからだ…オレ達の因縁のある『あの場所』で待ってるぜ。』

ブレイブはオメガの向かって行った方向に背中を向けるとその先に向かって飛び去っていった

「浩平、オレ達の母艦に戻った方が早いぞ。」

『そうだな…『あの研究所』のモビルガイスト生産施設…それがま

だ残っているなら、お前にも協力してもらった方が良さそうだけど…お前（傭兵）を雇う金は無いぞ。』

「安心しろ、金は要らない…今回の依頼人はオレ自身だ。」

翔はそう言いながら手に力を加えて握った

「それに…あの施設が残っているなら…オレには完全に破壊する義務がある。」

『お前だけじゃない…お前の言う責任なら、あの研究所の生き残り全員にある。あの場所を消し去る事はオレ達全員の責任だ。』

浩平の言葉を聞くと翔は一瞬だけその表情に笑みを浮かべた

「そうだったな…これはオレ達『クラスター』全員の責任だったな…。」

翔はそう答えると自分達の母艦への通信を繋げる

「翼、鋼矢…こちら、翔…。」

翔の言葉に対して通信機からの返事はすぐに返って来た

『こちら、翼…。何をしていたんだ？　こっちは見た事の無いモビルスーツに…。』

翼の言葉を聞くと翔は表情を凍りつかせて言葉をつづけた

「…モビルガイスト・ガスト…それがその機体の名前だ…その中に他の機体とは異質の機体は無かったか？」

『いや…量産機と見える機体が十数機だけだった…他の機体は…。』

「そうか…ちょっとオレは昔の友達2人と再会してな…その時にオレも見た事の無い機体…『ガスト』に襲われた…。それで…その昔の友人のザフトの軍人を一人連れ帰る事にもなったんで…準備しておいてくれ…。」

翔のその言葉に翼は表情を変えると叫んだ

『ちょっと待て、オレ達はあの…。』

「ファイバードの事なら浩平も知っているから問題もないだろう…。」

翔が言葉を続けようとした瞬間、浩平が通信に割り込んだ

『そう言う事だ、『天空の狩人』さん。まさか翔だけじゃなくザフトの元エースパイロットにこんな所で出会えるとは思わなかったぜ。』

浩平の言葉を聞くと複雑な表情をしていたがすぐに答えを出した

『分かった。それと…翔…お前は何であの機体の名前を知っていたのか、戻ったら話してもらうぞ。』

「…分かった…。」

翔は一言だけ答えると周囲の残骸に視線を向けた

「そう言えば…生産施設は事故が有った場合の事を考えて研究所とは離れた場所で作られていたよな…。」

『ああ、確か研究所はそうだったな…。』

オメガはその場で止まるとメインカメラを通してボロボロになった一機のモビルスーツをモニターの中に映し出した

「…ここにいたのか…『アルフォース』…。」

蒼い体と以前は美しかったはずの純白の翼を持った一機の残骸となったモビルスーツ…いや、モビルガイスト『アルフォース』の姿があった

『どうする…この機体があれば…ブレイブにも勝てるかもしれないぜ…。』

「…いや…もうこれ以上…あいつをこのままにしておけない…。」

翔がそう言うと彼の駆るオメガはアグニの砲塔をアルフォースに向けた…エネルギーの残量は残り少ない撃てて一撃だけだが、アルフ

ォースを消し去るのには十分すぎる

「…安らかに眠ってくれ…桜…。」

そういい残すと翔はアグニの引き金を引いた…翔が引き金を引いた瞬間、撃ち出されたアグニの閃光がアルフォースのボディーを飲み込んでいく、閃光の中に消えて行ったアルフォースはそのまま爆発を起して消滅していった

「…さよならだ…桜。」

以前、守れなかった人…守りたかった人の名を言いながら、翔は消えていくアルフォースに視線を向けていた

「ん？」

爆発するアルフォースの閃光の中に何かの影を見つけるとオメガはそれを手に取った

『無茶するなお前もアグニを使うなんて…最後には予備のバッテリーまで切れるぞ。』

「…『プロトタイプ・クラスター』…。」

浩平の言葉を無視する様に翔は見つけた何かに書かれている文字を読んだ

『ぷろとたいぷくらすたー？　なんだよ…それは…？』

そう言う浩平の乗るゲイツに翔の乗るオメガは手の中に有るカプセ

ルを近づけた

「このカプセルに書かれていた…それとこのカプセルの中にいる人間はまだ生きているようだ。」

カプセルの中には死んだように眠っている人影が存在していた…そのカプセルが何年前からその場所に存在していたのかは現在では分からない事だった

『…プロトタイプか…このカプセルの中の奴も…オレ達と同じ『被害者』と言う訳か…。』

「そう言う事になるな。」

オメガとゲイツの二機はそのままデプリ海の奥に消えて行った

それから数分後…シャイニングウィングの輸送船『ホワイトウィング』の格納庫…そこに翔を含めたシャイニングウィングのメンバー七人と浩平の八人が集まっていた

八人の前で翔は口を開いていく

「…あの機体はモビルスーツではなく『モビルガイスト』と呼ばれている物だ。オレがいた研究所…『クラスター研究所』で作られて

いた機体だ。そこではファースト・コーディネイターが現れる以前から行なわれていた『クラスター』と呼ばれている研究が行なわれていて、『クラスター』は実験の被験者達を示す言葉に成っている。地獄だった…仲間や友人達が実験で死んでいく中でオレは普通だった。」

そう言った後、翔はその表情に笑いを浮かべた

「いや…最初からオレは狂っていたのかもしれないな…。オレと浩平はそこの唯一の生き残りだった。オレは専用のモビルガイスト『アルフォース』が完成した時、一人で量産型の機体『ガスト』と研究施設を破壊した…そして、エネルギー切れになって宇宙を彷徨っていた時にブルーコスモス…当時の盟主だった時代の彼らに助けられて、現在に至る…。」

そこまで言った後、翔は冷たい表情を浮かべて言葉を続けていった

「そして、『モビルガイスト』はナチュラル、コーディネイターで関係なく使用できる機体として作られた物で一番の特徴は『無人でも戦える』という点だ。パイロットを必要としていないが…大量生産は出来ないはずの機体だった…。」

翔の言葉を聞くと翼は驚いた様な表情を浮かべて叫んだ

「ちょっと待て！！！　無人で戦える機体って、どういう意味だ！？　ザフトでも開発されていない技術を…。」

翼が全てを言い切る前に翔は自分自身が知るその答えを言う

「…モビルガイストのコンピューターには人の脳が使われている…

詳しい事は知らないが実験で死んだ被害者を部品にして作られた機体だ…それが量産されない…量産できない訳だ。簡単に言えば『モビルガイスト』は巨大な機械の体を持ったサイボーグと言った所だ…。」

言った本人である翔とそれを知っていた浩平の2人以外の全員が翔の言葉に全ての言葉を失ってしまっていた

「…そ・・そんな…そんな酷い事が許されていたんですか！？」

沈黙を破ったクウヤの叫び声が響くと翔はクウヤに視線を向けてその言葉に対して口を開いた

「その時点で両親や親戚…それを失った者、捨てられた者が集められていたからな…特に問題は無かった様だ。ただコーディネイターの被験者は浩平が始めてだった様だけどな。オレもナチュラルの中じゃ特別とか言われていたみたいだけど…詳しい事は知らない。」

浩平は翔の言葉を聞き終えると六人に視線を向けた

「そう言う事だ。オレも表向きは『血のバレンタイン』で妹が死んだ事になっているけど…本当はその研究所で死んだんだ。」

「それと…これはオレ達の問題だ…お前達に手伝ってもらう訳には…。」

鋼矢は翔が言い切る前に口を開いた

「悪いがオレは手伝わせてもらうぞ…。」

「オレも手を貸すぜ！　翔、浩平！」

鋼矢の言葉が響いた瞬間、エンの言葉も響いた

2人の言葉に同意する様にクウヤと翼から言葉を続けられていく

「聴いてしまった以上は手伝わない訳には行かない…オレも手を貸す『天空の狩人』の名に誓って。」

「翔さん、オレも手伝います。」

四人がそう言った後、クウヤと鋼矢の2人は残っているカスミと理奈に視線を向けた

「理奈…。」

鋼矢の言葉を聞くと理奈は笑顔を浮かべて言葉を続けていく

「はい、分かってます。サポートは任せてくださいね、鋼矢さん。」

「任せた。」

その言葉を聞くと鋼矢は簡単にその一言だけ答えた

「カスミ、お前は…。」

「手伝うな…なんて言わないでよ、クウヤちゃん。サポートは任せて。」

2人の言葉を聞くと翼は翔に視線を向けて口を開いた

「全員、お前に力を貸す事になった様だ。それに…そんな非道な方法で作られた機体の犠牲者をこの場所で増やす訳には行かない…。」
翼の言葉を聞くと翔の隣に立っていた浩平は楽しそうな笑みを浮かべて口を開いた
「いい仲間じゃないか。」
「そうだな…。浩平…決着をつけるぞ…オレ達の過去に…。」
「ああ。」
浩平が翔の言葉に答えた瞬間、クウヤは別の場所に視線を向けて『それ』を指差した
「ところで…翔さん…あれは何ですか？」
翔がオメガで拾ってきた『カプセル』がクウヤの言葉でその場にいた全員に存在を初めて認識された
「ああ…カプセルの中でコールドスリープしているみたいだけど…まだ生きているみたいだから拾ってきた。それにカプセルに書かれていた『プロトタイプ・クラスター』と言う言葉も気になったからな。」
翼はカプセルに近づくとそのカプセルに付けられていたコンピューターに手を触れて操作していく
「…型は古いが…システムとしては現在のプラントにも無い物だな

…技術力ではザフト以上か…翔の話でも気になっていたが…なぜ…こんな技術が存在している？」

緑色に輝いていたランプが赤に変わるとカプセルが開いて一人の少女が倒れてきた

近くにいた翔は倒れる前にその少女を受け止めた

「桜…。」

受け止めた瞬間、無意識の中で翔の口からその一言が出てきた…

これが…腰まで届く長い黒い髪を持った一人の少女…『プロトタイプ・クラスター』の少女との出会いだった

ＰＨＡＳＥ－０８『二つの再会と一つの出会い（後編）』（後書き）

次回予告…友との再会、一人は仲間として…一人は敵として…。翔は仲間と共に過去との決着を決意する。そして…。次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－０９『プロトタイプ・クラスター』！！！　捕らわれる過去、打ち砕けガンダム！！！

ＰＨＡＳＥ－０９『プロトタイプ・クラスター』

輸送船のブリッジ…そこに敵の戦力が映し出されていた

「敵は現在確認できている機体の中ではクラスター専用の『ブレイブ』…これは一機だけ存在している。他の機体は量産型の『ガスト』と言う名前の機体だ。」

ブレイブの映像は映し出されていないが…今まで翼達が撃墜していたモビルガイスト・ガストの映像が映し出されていた

「ブレイブの武装は両腕のビームクローだけの高起動型、接近戦用の機体だった…両腕のクローはシールドも兼ねていてビームコーティングもされている。改造された可能性があるから正しいかどうかは疑問だ…それでも、ガストに関して言うなら、ガストの武装はオレ達のＧＡＴ－Ｘナンバーの機体や浩平のゲイツと同じでビームライフルとビームサーベル…それに間違いは無い…。」

翔の言葉を聞いている全員の中に沈黙が流れていく…その沈黙を破って翼の言葉が響いた

「翔…奴らはどこでクラスターの技術やモビルスーツの技術を手に入れた…？　奴らが他にどんな技術を持っているのかも気になるが…一番気になるのはそれだ。」

翼の言葉に一瞬だけ迷うと翔はすぐに口を開いた

「……分からない……その一言に尽きるな…オレもパイロットが知る事が出来る事以上の事実は知らない…。」

「そうか…。」

翔の言葉にそう返すと翼は再び何かを考え始めた

翼が言葉を終えると翔は一つの事を思い出した

「そう言えば…あの子はどうした…？」

「はい、確か…まだ眠っていると思いましたけど…。」

クウヤの言葉に補足を加えるように鋼矢も言葉を続けて行く

「今は理奈が看病している…。」

鋼矢の言葉が響くと何かを思い出したように今までは傍観を決めていた浩平が口を開いていた

「なあ…あの子の入っていたカプセルに書かれていた『プロトタイプ・クラスター』の文字…やっぱり、オレはそれが気になるんだ。」

浩平の言葉を聞くと翔は何かを考え始めた

「…『プロトタイプ・クラスター』…確かに気になるな…本人に聞いてみれば分かるだろうけど…。」

輸送船『ホワイトウィング』のブリッジとは別に存在している空き部屋の一つ…そこに2人の人影が有った…

理奈は目の前で眠り続けている少女に視線を向けた

「はあ、綺麗な人ですね…。」

目の前で眠り続けている自分より年上に見える少女に視線を向けてため息をつくと理奈は言葉を続けていく

「私や鋼矢さん…クウヤさんよりも年上でしょうか…炎さんはともかく、翼さんよりは年下にも見えますし…やっぱり、翔さんと同じくらいでしょうか…。」

理奈が視線を真上に向けてそんな事を考えていた時だった

『う…。』

理奈が聞きなれない自分以外の声に気が付くと目の前にいる少女が目を覚ました

その少女は自分の隣に立つ理奈に気が付くと視線を向けて口を開いた

「君は…？　それに…ここは…？」

その少女の問いに理奈は笑顔を浮かべてその問いに対する答えを続けていく

「ここは私達の船の居住区の空き部屋ですよ。医務室といった設備は無かったので眠っている間、ここを利用していただきました。」

「そう…。」

理奈の言葉にその一言だけで簡単に答えるとそのまま視線を真上に向けた

（…ボクだけが生きていたのか…姉さんを犠牲にして…。）

理奈は持っていた通信機の回線を開いて他のメンバーのいるブリッジとの通信を繋げた

「あっ、鋼矢さん…それから…みなさん、あの人が目を覚ましましたよ。」

『そうか。』

通信機から鋼矢の声が響くと翔の声が続けられていく

『だったら、オレと交代してくれ…ガストを初めとする敵の戦力の説明も終わった事だ。それに…その子に聞きたい事がある…。』

「分かりました、伊達さん。」

理奈がそう答えて通信が切られると理奈はその少女に視線を向けた

「じゃあ、私はこれで…。」

そう言って部屋を出て行く理奈をその少女は無言で見送った

理奈が部屋を出て行ってから数分後…翔がその部屋の中に入ってきた

「君は…？」

翔はその言葉を聞くと表情を変えずに言葉を返す

「人に名前を聞く時は自分から名乗るのが礼儀だろう。」

翔の言葉を聞いてその少女は初めて笑顔を浮かべた

「そうだね…ボクは『真咲　葉月』…。改めて聞くけど…君は？」

「オレは『伊達　翔』…葉月さんが入っていたカプセルをオレが回収したんだ。」

翔の言葉を聞くと葉月と名乗った少女は言葉を続ける

「ボクの事はさんづけじゃなくていい。それで翔がボクの命の恩人になる訳だね。」

「ああ、それで…『プロトタイプ・クラスター』って言う言葉を知っているか？」

翔の口からその言葉が出た瞬間、２人の間に流れていた空気が凍りついた様に冷たい物に変わった

「それをどこで…。」

「葉月さんの入っていたカプセル…。あれに書かれていた…それにオレも『あの研究所』にいたからな…。」

葉月は翔の言葉を聞くと表情を凍りつかせて言葉を失っていた

「じゃあ…君も…クラスター…。」

「ああ…現時点ではクラスターのただ2人の生き残り…死んだと思っていた三人目と葉月さんを加えれば四人になるけどな…。」

表情は冷たかったが口調は軽い物だった

「君も…仲間なんだね…それで…。」

翔はその先に有る問いの内容を理解している様に葉月が言い切る前に言葉を続けていく

「…オレの専用機であるクラスター専用モビルガイスト『アルフォース』の完成と同時にオレが破壊した…研究者達もオレが…。」

『君も…大切な人をなくしだね…。』

突然の…予想もしていなかった一言に翔は反応が遅れていた

「え…な・・なにを…。」

混乱している翔に対して笑顔を浮かべると葉月は言葉を続ける

「ボクもただ一人の家族を奪われたから…あの研究所で…。ありがとう、悲劇を生み出すあの場所を壊してくれて…ボク達の様な人がこれ以上生まれなくて済む…。」

「イヤ…悲劇はまだ一つだけ残っている…クラスターの生き残りの三人目は…今は敵だ。モビルガイストの部隊を率いている。」

悲しそうな口調でそう言う翔は葉月に視線を向けた瞬間、2人の目が合った

「…友達だったんだね…その人とは…。君は優しい人だね…辛いのに約束を守るために行動している…。その人のために君はその人と戦おうとしている…違う？」

翔は葉月から視線を外すとその言葉を否定するように叫んだ

「何でそう思う！　オレはあの研究所で仲間が死んでいったのに何とも思わなかった…オレは…。」

吐き捨てるように翔は叫び続けた、苦しそうな表情で叫ぶ彼が全ての言葉を言い切る前に葉月は笑顔を浮かべてその言葉を否定していく

「君は狂ってなんかいない…。君は優しすぎるだけだよ…翔。」

「……。」

翔は自分の心を見透かした様な言葉を続ける少女…葉月に対して無言のまま背中を向けると部屋の扉に手を近づける

「…それから…言うのが遅れたけど…助けてくれて、ありがとう…

…。」

翔はその言葉を聞いて振り返った

「そうか…。」

その一言だけを言い残して翔は部屋を立ち去っていく…

その言葉を聞いて救われた気がした…自分が生き残っている事に対して思っていた…死んでいった者達への気持ちから

「ありがとうか…久しぶりに聞いたな…そんな言葉…。それに…それはオレのセリフだ。」

翔は通路の向こう側を睨むと冷たい表情を浮かべた

「…太一…お前をクラスターの呪縛から開放してやる…必ず…。」

そういい残すと翔は再び歩き始めた

「やっぱり、君は優しいよ…。それと…ごめん…翔…あの場所にぼくは行かなきゃならないんだ…。姉さんを助けるために…。」

悲しそうな…何かを決意した表情で言い切ると葉月は翔の向かって行った先にあるはずの格納庫に向かって歩き始めた

格納庫…整備を終えたオメガとゲイツの二機が発進の準備を終えていた

『翔、オレ達は…。』

通信用のモニターに映し出されている翼の言葉を聞くと翔は口を開いた

「ああ、何人かはここに残って船を守っていてくれ…守る機体のいない状態で敵が来たら危険だからな。それから、オレと浩平の機体に頼んでおいた『あれ』を積み込んでいてくれたようだな。」

『ああ、オレの特性で通常の物の数倍の破壊力だ。』

翔はモニターに映る翼に答えるとオメガのカメラを通して映し出されてる宇宙空間を睨み付けた

「伊達　翔…オメガ、出る！！！」

宇宙に飛び出したオメガの鈍色の体をＰＳ装甲がトリコロールカラーに染めていく

翔の駆るオメガが宇宙に飛び出した後、トリケロスを片腕に装備したゲイツがカタパルトに立った

「ゲイツの整備と補給…助かったぜ。」

浩平の言葉に通信機の向こう側から翼の言葉が続けられる

『まあ、礼ならあの『疫病神の不死鳥（ファイバード）』…それをオレ達の回収した事を黙っていてくれればそれでいい…。』

翼の言葉を聞くと浩平は軽い口調で返事を返していく

「オッケ～。分かってるよ、オレもそれの回収はモビルガイスト退治に比べればどうでもいい事だしな…。風間　浩平…ゲイツ、行くぞ！」

浩平の駆るゲイツも翔の駆るオメガの後を追って宇宙に飛び出していく…『Ｎジャマーキャンセラー』…この戦争の行方を左右する物なのだが…彼らにはそれ以上に『モビルガイスト』の存在の方が重要だった…

レーダーで二機のモビルスーツの反応が船から離れていく事を確認すると翼はコンピューターの操作を始めた

「…さて…一応、データを取っておくか…。」

翼の言葉に対して作られた疑問をクウヤは質問した

「翼さん、データって何のデータですか…？」

「試験型ゲイツ…コックピットのコンピューターのデータのコピーを全て、ブリッジに移しておいた…その中にある『ニュートロンジャマーキャンセラー』のデータを保管しておこうと思ってな。」

翼はクウヤの問いに答えながら、翼はキーボードを操作していく

「そんな物をどうするんだ？」

今度は鋼矢が翼に聞いた…実際、『Nジャマーキャンセラー』のデータだけでも…イヤ、『Nジャマーキャンセラー』のデータがあの機体のデータの中で一番重要なのだ…それが有れば地球連合軍の所有している核が使用可能となる…プラントが血のバレンタインの…ユニウス7の二の舞になる可能性があるのだ

「…船の方のデータは保険として残しておく…そして、オリジナルのデータは消す…これで少しは次の物が作られるまでの時間が稼げるだろう？」

翼の言葉でその場にいた全員は翼の行動の意味を理解した…翼は『

Nジャマーキャンセラー』の完成を少しでも遅らせるためにデータを抹消としていた事に気が付いた

「ん？」

翼はコンピューターを操作している途中…格納庫で動き出している背中のバックパックが白く塗られたジンの姿に気が付いた

「…あれは…予備に用意してあった翔のジン！？　誰が動かしているんだ！？」

翼は慌てて制止しようとするがそれは遅かった…誰かが乗ったジンは宇宙の闇に飛び出していった

「くっ…あれはオメガが手に入ってから整備した記憶がない機体だ…それに…装甲も通常のジンに比べると薄すぎる…機動力のために防御を限りなくゼロに近くした機体…翔以外には操れる物じゃないんだぞ！？」

ジンの飛び去っていった方向を睨みながら翼は言葉を続ける

「流石はオレの改造したジンだ…もう見えなくなるとは…。クウヤ、一応…翔達に連絡だ『何者かがジン一機を盗んでお前達の方に向かった』と伝えておいてくれ。」

「追いかけなくていいんですか、翼さん？　オレのセイバーイージスなら、追いつけるはずですけど…。」

翼はクウヤのその言葉に対してキーボードに視線を向けながら無表情のまま答えた

「追いかけなくていい…軽量化と高機動化のし過ぎで並みのパイロットには操れない機体だ…大体『ＧＡＴ－Ｘナンバーズ』の機体の方が能力も高いからあの程度の機体の一機、奪われた所で問題は無い…そんな事より…。」

翼はそう言い切るとレーダーに視線を向けた…そのレーダーには無数のモビルスーツが向かって来る反応が映し出されている

「…お客さんだ…オレ達は翔達が目的の場所に行く邪魔をする奴らを引きつける囮役だ…精一杯、歓迎してやれ。オレもこの作業が終わったら、スナイパーで出る！」

翼の言葉を聞くと炎、鋼矢、クウヤの三人は声をそろえてその言葉に答える

『『『了解！！！』』』

三人の言葉が響くと三人は格納庫に向かって走り出した

「…誰が…あの翔の友人とか言うザフトのパイロットは先に出撃した…他のメンバーは全員ここにいる…だとしたら…。」

ジンに乗って飛び出して行った可能性がない者を除外して行った結果…一人の人物の事が浮かんできた…翔が助けた…『あの少女』

「誰か…あの葉月とかいう子の現在地を調べてくれ！　他の機体を持ち出さなかったから敵意は無いと思うが…何が目的なんだ！？」

高性能なスナイパーバスターではなく量産機であるジンに乗って行った事から考えて、自分達に対して敵意がないと推測すると翼は再びキーボードを操作しながら彼の意識は思考の中に沈んでいく

（……。何か有るな…翔と浩平が知っている事以外にも…この場所には何か秘密が有るはずだ…。）

翼の意識が思考の中にある時、彼の目の前にブリッジを通して広がる宇宙空間では、グラップラーデュエル、ブリッツシャドーエッジ、セイバーイージスの三機が量産型モビルガイスト・ガストと戦闘を開始していた

囮となった他の『シャイニングウィング』のメンバー達がガスト達の相手をしていた時、翔の駆るオメガと浩平の駆るゲイツが目的の『その場所』に向かっていた

「…変だな…ここまで一機も敵が出てこない…。」

『確かに…お前の仲間が囮になってくれていても…ここまで守りが手薄なのは不自然だよな…。』

ゲイツからの通信を通して聞えてくる翔の考えを肯定する浩平の言葉を聞いて翔は周囲に注意を向けるがそれでも、周りには自分達以外の機体の存在は感じられない

「…浩平…敵はいない様だけど気を抜くなよ…。敵は…どこから出てくるか分からないぞ。」

『ああ。』

翔の言葉に答えると浩平はゲイツのコックピットの中にあるレーダーに視線を向ける…敵の反応を調べていたが…敵の反応はない

『反応は…待て、ジンが一機、こっちに近づいてきているぞ。それにこの反応はお前達の機体だぞ。』

浩平の言葉を聞くと翔はオメガの全身を自分達に近づいてきているジンに向ける

「あのジンは…オレの予備の機体！！！」

向かってきている自分達の機体である以上、通信機の周波数はすぐに確認できる…翔はジンとの通信を繋げると浩平の移っている物の隣にある小モニターに映し出された人物を見ると翔は口を開いた

「『君は！？』」

翔だけではなく小モニターに映し出されている人物…葉月も同じ様に驚いた様な叫び声を上げた

「葉月さん…。」

『翔…。』

2人はお互いに自分の機体の小モニターに映る人物の名前を呼ぶ

『クラスター』…2人を繋ぐその言葉が2人に目の前の相手がその場所にいる理由を教えていた…

「…あそこはオレと浩平で叩き潰す…だから早く戻れ！」

翔の言葉に表情を変えずに葉月は言葉を返す

『…それは無理だよ…あそこには…あそこにはぼくの姉さんがいる…だから、ぼくは姉さんを助けたい…。』

モニターに写る葉月の悲しそうな声を聞いた瞬間、無数のビームが三機のモビルスーツに向って撃ち出された

『『「なに！？」』』

慌てて翔のオメガ、浩平のゲイツ、葉月のジンの三機はその場所を離れて自分達に向かって来るビームを回避した

「そろそろ出てくると思っていたが…やっと出てきたか！！！」

翔はレーダーで相手の位置を確認すると自分達に向って攻撃してきた存在を視界の中に捕らえた

「……ガスト……。」

翔はそう呟くとモニターに写る葉月に視線を戻す

「葉月さん、話は後だ…。」

『分かった。…それと…葉月でいい…さんはいらないよ。』

葉月の言葉に笑みを浮かべると翔は叫ぶ

「ああ…行くぞ、浩平、葉月!!!」

翔のオメガ、浩平のゲイツ、葉月のジンの三機が散開して自分達に向ってきた十数機のガスト達に向っていく

ＰＨＡＳＥ－０９『プロトタイプ・クラスター』（後書き）

次回予告…敵モビルガイストとの戦闘、そして…ついに彼等は目的の場所を発見する。そこは翔に…浩平に…葉月とって、決して忘れえぬ場所、憎しみと思い出の場所。心無き無人機械兵（モビルガイスト）の護るそこを舞台に翔は…。次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－１０『友達』！！！　捕らわれる過去、打ち砕けガンダム！！！

PHASE－10『友達』

オメガの撃ち出すアグニの閃光がガスト達を飲み込んでいく…そして、オメガはシュバルトゲベールを向けて、敵の撃つビームライフルを避けながら、残っているガストに近づいていく

「次！！！」

オメガの振る対艦刀『シュバルトゲベール』の一閃が敵を引き裂くと素早く肩にあるビームブーメラン『マイダスメッサー』を投げて、後方にいる敵の頭部とビームライフルを持つ手首を切り落とす

「こいつで…ラスト！！！」

ビームブーメラン『マイダスメッサー』を肩に戻すとオメガは最後の一機に向って対艦刀を振る

オメガの振るシュバルトゲベールの一閃がガストの体を真っ二つに切り裂くと最後の一機だったガストは爆発した

「『閃光』を出すまでの相手じゃなかったな。」

最後に倒した一機で翔は自分が向った先に存在していた敵機を全て撃墜した事を確認するとモニターから他の2人の様子を視界に入れた

浩平の乗るゲイツはガストの持つビームライフルから撃ち出される

ビームを避けながら、ガストに近づくとトリケロスに装備されているビームサーベルで敵の体を切り裂く

「へへ…これで終わり。」

トリケロスを装備されていない腕でビームサーベルを抜くと自分の周囲にいる一機を引き裂いて最後に残る一気にトリケロスを向けてビームライフルを撃つ

本来、ブリッツのトリケロスに装備されているビームライフルの破壊力は他の四機に比べると低い物になっているがそれでも、ビーム兵器の持つ破壊力は強力で十分に通常の装甲しか持たないガストを撃破できる破壊力を持つ

完全に余談になるのだが…浩平の駆るゲイツのトリケロスは元々ブリッツに装備されている物だが鋼矢のシャドーエッジのトリケロスに装備されている物は通常のビームライフルに変更されているため僅かな差だが通常のブリッツに比べて強化されている…

翔の乗るオメガ、浩平の乗るゲイツ…この二機はこの時点の技術の中では連合とザフトの最高の技術で作られた機体といっても過言ではない

…ただ…一つだけ問題があるとすれば…葉月の乗るジンだった…彼女の乗る機体は翔が元々操っていた機体だがそれは翔のパイロットとしての技量と弱点を持ってまで手に入れた長所が機体の弱点を補っていた…連合の『G（ガンダム）』の存在を知るまではパイロットの実力しだいで最強にもなれる機体と改造した翼は言っていたが…それは逆に

言うとその機体の長所を最大限に引き出せる技量を持ったパイロットの存在がなくなった瞬間、その機体は最弱の機体にもなってしまうと言う事でもあった（最も中級ほどの腕と多少の経験があれば十分通常のジン以上に戦える機体とも豪語しているが）

『真咲　葉月』…彼女のモビルスーツの操縦技術は悪くは無い…だが…

「この！」

葉月の乗るジンは自分の後方にいるガストにマシンガンを向けるが…背後にいるガストの持つビームライフルによってマシンガンごとジンの腕を奪われた

「つぅ…この！！！」

それに気が付いてジンは腰に装備されている最後に残された武器である重斬刀を抜いて、ガストに接近戦を挑もうとしたがそれを許すほど敵は愚かではなかった

ガストの動きはコーディネイターの一般の新兵程度のレベルからある程度の経験を積んだパイロットと同等になる…当然ながら、戦う事に慣れていて、高い能力を持った翔と浩平の2人の敵ではないが…葉月には決定的に経験が不足していた

ガストの攻撃で残されている腕を最後の武器と同時に失ったジンの周囲には十機程度の数のガストが取り囲んでいた

「武器は…もうない！？　…どうすれば…。」

ジンにはもう武器がない事に気が付いているガスト達はビームサーベルを抜いてジンに近づいていく

真っ先に飛び出したジンがビームサーベルを振り上げてそれを葉月のいるコックピットに向って振り下ろされる

（ダメだ…間に合わない…ここで終わりなの…姉さん…。）

ビームサーベルが振り下ろされる瞬間…葉月にはそれは酷くゆっくりと流れている様に感じられた

（死ぬ瞬間って…こんな感じなのかな…？）

死の瞬間…それは訪れる事はなかった

葉月が死を覚悟した瞬間、戦闘不能になっていたジンに対して、ビームサーベルを振り下ろそうとしたガストの背後から向ってきたビームブーメラン『マイダスメッサー』がガストの首とビームサーベルを持った腕を切り落とした

「え？」

ビームブーメランの軌道に視線を向けるとそこにはガストの頭を切り落としたビームブーメランを肩に戻したオメガの姿が葉月の視界の中には有った

オメガは素早く背中に装備された対艦刀『シュバルトゲベール』を抜いて頭と腕を失ったガストに向って振り下ろして真っ二つに切り裂く

対艦刀『シュバルトゲベール』の一閃でガストを切り裂くと爆発する前にオメガはジンの機体を受け止めるとその場所から離脱した

「ナイスだ、翔♪」

別の場所にいるゲイツの装備したトリケロスから撃ち出されるビームライフルが突然の事に反応が遅れたガストの頭を次々と撃ち抜いて行く

「はぁ…もしかして、モビルスーツの操縦初めてだった？」

翔はモニターに視線を向けて呆れたような声でそう言った

翔の視線の先に存在しているオメガのコックピットのモニターには無残にも両腕を失ったジンに乗る葉月の様子が映し出されていた

翔の言葉に対して一言も言い返す事は出来ないがそれを認めたくない様な表情で葉月は同じ様にジンのモニターに映し出されている翔を睨んでいた

『ぼくは今までコールドスリープにされていたんだ…。』

葉月はモニターから翔を睨み付けると一言だけ反論し再び黙り始めた

一度視線を外して、その言葉に無言のまま納得するとモニターに写

る葉月の様子を再び視界に入れる

「…ヘルメットも有るみたいだし宇宙空間に出ても問題は無いな…。その状態じゃあ、戦闘は無理そうだ…。その機体は破棄してこっちに乗り移れ…。」

『…分かった…。』

翔の言葉に対して納得が出来ないと言う表情を浮かべながら葉月が答えるとモニターに映し出されている映像が消える

オメガのコックピットに映し出されている外部の映像で葉月がジンを降りた事を確認すると翔はオメガのハッチを開放する

ジンから乗り移ってきた葉月がオメガのコックピットに乗り込むと再びハッチを閉じて翔は自分の後ろにいる葉月に話しかけた

「しっかり捕まっていろ。」

「分かった。」

コックピットにいる二人の間に簡単な会話が交わされるとオメガはガストと戦っている浩平のゲイツの方向に全身を向けたが…

『はーははは…♪　遅いぞ、翔。』

浩平の乗るゲイツ一機だけで敵は全滅させられていた

「お前…ビーム兵器主体のその機体でその数を相手にそこまで戦って、バッテリーは大丈夫なのか？」

ＰＳ装甲は装備されていないとは言ってもビームライフルにビームサーベルと言ったビーム兵器を装備したゲイツは戦闘時にはエネルギーを多く消費する

『問題ないぞ、予備のバッテリーがあるからな♪』

「そうか。オレと葉月もすぐに合流するから待っていてくれ。」

能天気な笑い声が響くとモニターに映し出されていた浩平の映像が消えた、彼の言う予備バッテリーの出所はすぐに想像が……着いてしまう

「…翔…大丈夫なの…あれで？」

戦闘中とは思えないほど能天気な浩平の態度に葉月は呆れた様に言う

「性格には問題大だけど実力はある…浩平はオレ達の中でも特例…『クラスター兼コーディネイター』だ。」

「本当に特例だね。コーディネイターであの研究所に連れてこられる例はぼくがいた頃にはなかったと思ったけど…。」

「確かに…戦争の引き金になった『血のバレンタインの悲劇』の舞台『ユニウス7』のただ一人…正確には2人だけの生き残りとして捕まったからな…。」

葉月は翔の言葉の中にある一つの疑問に気が付いた

「2人？」

葉月が翔に聞き返すと翔はすぐに言葉を返す

「ああ、あいつの妹も一緒に連れてこられた…。そして、生き残ったのはオレとあいつ…それにあと一人だけだ…。」

葉月は翔の言葉を聞くと静かに視線をオメガのメインカメラを通して正面に広がる宇宙に向けると口を開く

「そうだったんだ…。あれを破壊できれば…全て終わるかな…翔？」

「終わらせる…絶対にな…。」

翔は正面を睨みつけながら握っていた手に力を加えた

無数のモビルガイスト『ガスト』の残骸の中に待機していたゲイツ

の姿を確認すると翔の乗るオメガはゲイツの隣に立ち止まる

『遅かったな、翔。』

オメガのコックピットの中のモニターに浩平の顔が映し出されると翔と葉月はモニターに視線を向ける

「そんなに時間はかけていないぞ、浩平。そんな事より…。」

『ああ、今まではガストに気を取られて気が付かなかったけどな…やっと見つけたぜ。』

「あそこが…。」

翔、浩平、葉月の順に言葉を続けると同じ場所に視線を向ける

三人の視線が重なる先には…一つの不気味な宇宙要塞とも工場とも言える施設が存在していた

そして、その周りには周囲に有る残骸を分解しながら、ガスト達が巣に餌を運ぶ働き蟻の様に施設の中に運びこんでいた

「…ガストの数が多いな…。…それに施設の規模から考えて内部に侵入して、爆弾を仕掛けた方が良さそうだな…。翼の奴が特製とか言っていたから破壊力には期待できそうだな。」

翔はそう言うと不気味な笑みを浮かべた

『オレの機体の中にある黒いカバン…中身はそれか…？』

「お前の機体だけじゃない…オレの機体にも二つ同じ物を用意してある。翼特製の時限爆弾…本人が言うには破壊力も通常の物の比では無いらしいぞ…。」

『便利だか不便だかよく分からない品物だな…それ…。そんな事より、ガストはどうする…お前の持つ『閃光（ルナティックライトニング）』の一つでもまた披露するか？』

「…武器を装備していない様だから、オレの大技を一つ使えば一撃で全滅は可能だな…。でも、倒してもすぐに増援は現れるだろう…。潜入後、規模から考えて爆弾をセット…その後、脱出する。時間は九十分。」

翔は浩平の言葉を聞いて導き出した答えの一部を言葉にした

『九十分以内に終わりそうか…お互いに…？』

「中枢はオレがやる…お前は外部を頼む。仕掛け終わったら先に逃げてくれ。」

『了解。』

浩平からの返事が響くと今まで翔の後ろで会話を聞いていた葉月が口を開いた

「ねぇ、翔は…どこを破壊すれば完全に破壊できるか分かっているの？」

葉月のその言葉に一度だけ笑みを浮かべるとすぐに言葉を返す

「そう言う葉月は知っていそうだな…？」

「自爆装置の位置は分かっている…でも、周囲にまで…。」

自爆装置は中央だけしか破壊できないと言う事はその言葉からすぐに理解できる

「分かった。後は…どこから進入するか…？」

翔が施設を破壊する手段を決めた時、再び施設に視線を向けた時、ガスト達は一斉に施設の中に戻っていく

「何が…？」

『施設後方…別……入口……が有……そこから……中…に入れ』

ノイズが入り途切れ途切れな通信が届いた瞬間、翔はその通信の声に聞き覚えがある様に感じた

それを表情に出さずにモニターに写る浩平と自分の後ろにいる葉月に視線を向ける

「葉月、浩平…罠か…誰か味方が中にいる…どちらだと思う？」

「『ぼく（オレ）は後者だと思う。』」

翔の言葉に対して葉月と浩平は同時に同じ言葉を告げる

「それに翔は誰からの通信か分かっている。ぼくはそう思う。」

「…ああ…誰が聞き間違えるか…あの声は…あそこで犠牲になったと思っていた…敵として再会してしまった…オレの『親友』だ…。」

無意識の中で翔は手を強く握る

「そう…だったんだ…。ごめん、悪い事を聞いて…。」

葉月は翔の言葉を聞いて一度、視線を外してそう言った

「気にするな…あの通信があいつからの物なら…オレはあいつの言葉を信じる…。オレの親友だからな…。」

オメガとゲイツは正体不明の通信に指示された場所に向って飛ぶ…

その施設の中で待つ物は何なのか…

ＰＨＡＳＥ－１０『友達』（後書き）

次回予告…モビルガイスト製造プラント、そこに乗り込む事に成功した翔、浩平、葉月の三人。彼等はそこでかつての親しき者達の末路を知る。次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－１１『蒼い刃』！！！　闇の過去、切り裂けガンダム！！！

PHASE－11『蒼い刃』

オメガとゲイツが格納庫の中に降りると3人はそれぞれ自分が乗っていた機体のコックピットから降りた…その格納庫の中にはその二機以外に他にモビルスーツ、モビルガイストの姿は無い

「さて、浩平…予定通りに爆弾をセットして逃げるぞ…爆弾をセットしたら一時間後ここに集合だ。」

「ああ、自爆装置を探すよりは確実だからな…見張りもいないだろうし楽な作業だな。一時間たっても来なかった場合は先に逃げるぞ。」

浩平は翔の言葉にそう答えると格納庫を立ち去っていく

格納庫に残されている翔と葉月はお互いにまだ行動に移っていない事を確認すると二人はほぼ同時に口を開く

「「それで…どうするんだ（するの）？」」

同時に同じ言葉を言った事に一瞬、驚いた様な表情を浮かべて言葉を止めた

「「……。」」

一瞬だけ二人の間に沈黙が流れると今度は翔から口を開く

「ああ、オレはあの通信の相手…ブレイブのパイロットの事が気になるからな…あいつが生きてるなら…オレは助けたい…。」

翔の言葉を聞くと葉月は微笑を浮かべて口を開く

「だったら、ぼくも一緒に行くよ…ぼくも探している相手がいるから…。」

「そうか…。」

葉月の言葉に翔が答えると二人は浩平の向かった格納庫の出入り口に向かって歩き出す

無機質な場所…そこに有る無数のモビルガイスト達だけを見れば『軍事基地』と言っても過言ではないが…その場所のイメージは『研究所』と言う物を想像させるがそのイメージは間違いではない…そこは以前、クラスター専用の機体『モビルガイスト』を作り出す為の研究所だったのだから

「相変わらずだな…ここも…。」

翔はそう呟く、幼い日の記憶…彼がまだ星矢に助けられる以前…友達や大切な人と共にその場所にいた記憶が蘇る

「ぼくはよく覚えていない…姉さんがいなくなってから…すぐにコールドスリープされたし…監獄の様なあの場所から出た記憶もほとんど無いから…。」

葉月は押し殺した声で翔に言葉を返す…自分も一度は体験した事だから、それが彼女にとって辛い記憶だと言う事は翔には簡単に想像出来る

「そうか…悪い、イヤな事を思い出させたな…。」

そう一言だけ簡単に答えると翔は視線を正面に向ける

『最悪の記憶』…一言でいってしまえばこの場所での記憶はそれになるだろう…翔には大事な友達や大切な人と共に有った時間の大半を最悪な記憶と共に過ごしているそれは葉月も同じだが…消し去りたい記憶でありながら忘れられない大切な記憶と共にあり続ける…そこは…未来永劫二人の…イヤ、浩平を含めれば三人の記憶の中に残り続ける最悪の場所…その中に今、翔達はいる…『クラスター』と言う呪縛に捕らわれた者達は…

翔達の目の前には何も変わる事は無く無機質な通路が続いている…相手からの妨害も無くその道を進んでいると扉が現れた

「…一応…中央エリアには近づいている見たいだね…。」

「ああ、同じ所をまわっている訳じゃなくて安心したな。」

目の前に現れた扉を睨み付けながら二人はそう呟いた…窓も存在しない通路の無機質な壁と同じ印象を与えて、一見するとそれが壁とも思えてしまう…それでも、その扉に書かれている『関係者以外立

入禁止』の文字がその先に何か有ると言う事を告げていた
翔は目の前にある扉に手を触れる…冷たい…金属の持つ無機質な感触が翔の掌に伝わってくる
なつかしさ…友達と過ごした日々…そして…憎しみと自分自身が力を手に入れた瞬間…様々な記憶が翔の中に蘇っていく
「帰って来たんだな…オレは…この場所に…。」
そう呟くと扉から手を離して左右の壁に何かを探す様に視線を向ける
右の壁が一ヶ所だけ色が変わっている事を確認すると翔はその場所に触れる…翔が触れた瞬間、壁の一部が開いて手動で扉を開く為のレバーが現れた
（…覚えている…体が記憶している…この場所の事を…オレは…。）
翔は無意識の中で辛そうな表情を浮かべる…葉月は翔の表情に気がつくとそっと…翔の肩に手を触れた
「…大丈夫…。」
感情を押し殺しながら何も言わない葉月に翔は呟いた
「…うん…。でも、翔も無理はしない方がいいよ…。」
「…無理はしない…無茶はしてもな…。」
軽い口調でそう答えると翔はレバーを動かした

「それじゃあ、対して代わらないと思うけど。」

「そうだな。」

二人の視界の中に有った壁が左右に分かれて動き出していく…壁が開いていくのに連れて壁の向こう側の闇の中に広がる景色が二人の視界の中に飛び込んできた

「「な！？」」

二人の視界の中に飛び込んで来た異常な光景…部屋全体に広がる巨大なコンピューター…そこまでは普通だったが…問題はその先だった…その部屋の…コンピューターの中心に有ったのはカプセルに入れられた……無数の人の脳……

「…姉さん…。」

その中の脳が入ったカプセルの一つに着けられたプレートに着けられていた『Ｓ．ＭＡＳＡＫＩ』の字を見た瞬間、そう呟いた

「運が良かったと言う事か…オレは…。」

唯一残っている空のカプセルの一つに視線を向けて吐き捨てる様に翔は呟いた…そこに書かれていた文字は『Ｓ．ＤＡＴＥ』…彼のイニシャルが刻まれていた

それを一度、視界の中から外すと他のカプセルを視界の中に捕らえていく

「……こいつら、人を何だと思っている……。」

一通り、カプセルを確認すると翔は近くに有ったコンピューターにデータを表示させてそのデータを一つ一つ確認していく

「…モビルガイスト制式型…サポートシステム…コンピューターで優秀なパイロットの脳を取り出し、その戦闘データ思考パターンをデータ化…。クラスターと言いこのシステムと言い…何処までも狂っている連中だったな…こいつら…。」

データを確認していく途中で翔は一つの文章に視線を向けた

「ん？　文章のデータ…オレ宛？　『翔、これをお前が読んでくれている事を祈る。お前が読んでいる頃オレはもう死んでいるだろうな、オレは…オレ達はお前が生きていてくれる事、それだけで嬉しい、お前はオレ達の希望なんだ…だから、お前はオレ達の分も自由に生きてくれ…それから、もう一度、この場所に来たなら、受け取ってもらいたい物がある…アルフォースの装甲から造った物、それはこの部屋の金庫の中、パスワードはオレ達だけが知っている事だ。』…そうか…太一…お前はもう…死んでいたんだな…生き残っていたのは…やっぱり、オレと浩平だけだったのか…。」

覚悟はしていた…自分達をここに導いたあの通信の主が誰なのか…それは関係ない、友達はもうこの世にはいない…それが分かっても不思議と翔の心には悲しみも涙も無かった、悲しみは尽きた、涙ももう枯れ果てている

翔はそれを読み終わると後ろに視線を向ける、その先にはその文章の中に書かれていた通りに電子ロックの掛けられた金庫が有った、翔はその視線の先に有った金庫に近づくとロックを解除するための

パスワードを入力する

「…パスワードは…オレ達だけが知っている事…『エスペランス』…『希望』だ…。」

扉が開くと翔はその中には鞘に収められた一振りの刀が入れられていた…それは新品同様の輝きを見せている…翔はその刀を手に取るとその刀を鞘から抜いて、そのまま一度、横に薙ぐ

「…蒼い刀身…アルフォースの色か、いい刀だな…お前達の思いも一緒に持っていく…ここに住む過去の亡霊達を葬るために…眠らせてやる…お前を…。」

刀を鞘に収めると翔は持ってきていた爆弾をその部屋にセットし始めた

「葉月…。」

「いい…姉さんをこのままにしておけない…早く眠らせてあげてほしい…ぼくも姉さんの分まで生きる…それが…ぼくが姉さんにしてあげられる事だから…。」

「分かった。」

最後に脳が入れられているカプセル…その一つ一つに爆弾を仕掛けるとスイッチを入れて出口に視線を向ける

「行こう、爆発まで時間が無い。」

「うん。」

翔の言葉に葉月が答えると二人はその部屋を後にする

「「さようなら…。」」

そこに有る別々の相手に対して同時に出された二人の同じ言葉が重なって響いた

格納庫の入口…丁度、そこには一通り爆弾を仕掛けたのか…空になった鞄を持って立っている浩平の姿があった

「よう、お前たちも無事だったみたいだな。」

「悪いが、オレはこんな所で死ぬ気は無い。」

「ぼくも同感だね。」

浩平の言葉に二人がそう言葉を返すと浩平は翔の手の中にあるそれに気が付いた

「それ…刀か？　どうしたんだよ、そんな物、どこに…？」

「ああ…この中で見つけた…オレの友達がオレに残してくれていた

物だ…。」

翔は鞘に収められている蒼い刃を抜くとそれを浩平に見せる

「刀身が蒼い刀…珍しいな。」

感心するようにいう浩平の言葉を聞くと翔はすぐに言葉を続ける

「ＭＳの装甲から造った物らしい、オレの使っていた『あの機体』のな…。それにあいつらの思いも一緒に連れて行くには丁度いいな」

「そうだな。」

翔の言葉の意味をその一言で理解すると浩平はそう簡単に答える、全てを知っているだけにその言葉だけで全てが理解できるから…

「そんな事より早く脱出するぞ。リモコン式のクセに時間制限有りと言う、翼の作った爆弾のタイムリミットが近い。」

時間は最初の爆弾が仕掛けられてから一時間十分ほど経過していた、残り時間はあと二十分だけ、浩平と葉月の二人は翔の言葉に頷くとそれぞれ翔と葉月はオメガに、浩平はゲイツに機体に乗り込む

オメガが起動すると装甲は鈍色から鮮やかなトリコロールカラーに染まり、オメガのメインカメラに光が宿り、ゲイツの頭部にモノアイが現れる

二機のＭＳのバックパックのブースターに炎が宿り、オメガとゲイツの二機のＭＳは格納庫から飛び出す

オメガとゲイツの二機が格納庫か飛び出してから十数分後、施設は仕掛けてあった爆弾が起動して爆発を起していく

爆発し残骸へと変わっていく施設に視線を向けながら、翔は周囲への警戒を解く事は無かった…彼の頭の中にたった一つだけ存在している一つの悪い可能性が当たらない事を祈りながら…

「…唯一つ残されたモビルガイスト・ブレイブ…あれも同時に破壊できればいいが…。」

実際、モビルガイストでも量産機のガストは問題にならない（と言うと間違いになるがオメガを初めとするGXナンバーの機体より弱い）が問題なのはブレイブだ、クラスター専用のモビルガイストの恐ろしさを一番理解しているのは何よりもそれを一度でも操った事が有る翔である

『レーダーにMSの反応が有る…イヤ、モビルガイストと言った方が正しいか…数は五機だ。』

翔と浩平の機体のモニターにもその五機のMSは視認できた…五機の機体は全て見覚えが有ったその四機は量産タイプのガスト…そして、その後方に立つ金色の機体…モビルガイスト・ブレイブ

「ブレイブ…。」

悪い可能性を的中させてしまった翔は金色の機体ブレイブを睨み付けながらその名前を呟く、金色の機体ブレイブ…自分の友の為に造られて、友達の恋人を犠牲にして存在している機体が彼の目の前には存在している

助けたかった相手がいない今、以前もそうだったが…ブレイブを見ても撃つ事に対して翔の中に戸惑いは無い…

「浩平…ブレイブはオレが倒す…。」

『OK～、ガストはオレ一人で十分だ♪』

軽い口調で答えると浩平の乗るゲイツはガスト達に向かっていく、四機のガストがそれに反応して動き出すとオメガはシュバルトゲベールを抜いてガスト達が離れたブレイブに向かっていく

『負けるなよ、翔。』

最後に激励の言葉を告げると浩平は通信を切った

浩平のゲイツがガスト達との戦闘に入ると翔の乗るオメガはシュバルトゲベールを構えてブレイブに向かっていく

「消えろ…過去の亡霊！！！」

ブレイブに向かって振り下ろされるオメガのシュバルトゲベールによる斬撃をブレイブは両腕の大型のビームクローを展開して受け止める

ブレイブはオメガの振り下ろしたシュバルトゲベールを弾き返すと素早くビームクローを振る

「クッ！！！」

ブレイブの振るビームクローを素早くシュバルトゲベールで受け流

し、反撃の一閃を与えるがブレイブはそれを素早く避ける、イヤ、それは避けたと言うよりも一撃を加えた直後に離脱したと言った方が正しいだろう

『ヒット&ウェイ』…高速で移動し相手を翻弄、接近戦で攻撃し、ダメージが有っても無くても関係なく素早く相手から離れる、それがブレイブの基本的な戦術なのである

「チッ。」

「相手は接近戦用の機体、接近戦は不利だよ。」

シートの後に掴まっている葉月の言葉に納得しながらも翔は接近戦を止めようとしない…なぜなら、ブレイブは遠距離を完全に無視した純粋な接近戦用の機体であるだけではなく、それと同時に高速戦闘も得意としている、遠距離からの砲撃は回避される危険性の方が高く、エネルギーも多く消費するアグニによる砲撃より、シュバルトゲベールによる斬撃での戦闘の方が有効と考えた結果だ

休み無く繰り出され、すぐに相手が離れるために反撃のチャンスを得る事が出来ないブレイブのビームクローによる連続攻撃を避けながら、翔は葉月の言葉に答える

「遠距離からの撃ち合いはかわされるだけ、アグニは攻撃力が高い代わりにエネルギーを消費する分、長引けばオメガの方が不利だ。」

敵の高速戦闘用の機体に対してオメガは近遠距離用のエネルギーの消費の大きい武器を無理矢理装備した機体でそのどちらにも対応できて、攻撃力が高いと言えば聞こえがいいが言い方を変えれば能力的にバランスが悪く扱いにくい

扱いにくい武装を無理矢理装備した汎用機と純粋な高速格闘戦用の機体、この二機の差は機体性能以前にコンセプトの差ともいえる物だった

（ルナティックライトニングが使えればな…。）

翔は自分の持つ戦術の中で唯一、ブレイブを倒すことの出来る可能性を持つ物を探し当てたがそれを使う場合の問題点を考えて頭から消した

一対一の場面での『ルナティックライトニング』はブレイブの様に高速で動く敵には使いにくい…直線的な動きと急激な方向転換、連続的に繰り返される斬撃の檻に閉じ込めて零距離射撃による最後の一撃を撃ち込む技であり、高速で動く相手に対して使うには一度相手の動きを止めるしかないのだ

考えを纏めると翔はオメガのモニターの中から両腕のビームクローを構えてオメガに向かって来るブレイブを睨み付ける

「負担が大きいけどな…肉を切らせて骨を断つまでだ…。」

オメガは対艦刀『シュバルトゲベール』をシールドを装備した腕に持ち替えてシュバルトゲベールを持たない事で開いた腕を相手に向ける形となる構えをとる

「肉を切らせて…って、どうする気なの？」

葉月の言葉に翔は怪しい笑みを浮かべてモニターからブレイブを睨む

「…なーに…強制的に止まって貰うだけさ…あいつにな…。」

「……。」

翔の考えを理解してしまった葉月はその事で思わず言葉を失ってしまった…翔の考えとは…そう…

翔の考えも知らずにブレイブはオメガに向かっていく

「来い！！！」

オメガはブレイブの突き出したビームクローに自分から腕を叩きつけた

ブレイブのビームクローはオメガの突き出した片腕に深く突き刺さった、ダメージは有っても痛みは無い…翔の策はＭＳだから出来る策であった

「次！！！」

ブレイブのビームクローが深々と突き刺さったオメガの腕を引きちぎるとオメガの行なった予想外の行動に反応できないブレイブの後に回り込み、シュバルトゲベールによる一閃でブレイブのスピードを生み出す背中に装備された大型ブースターを叩き切った

「これでスピードは殺した…。」

「ホント、君も無茶するね。」

自らの機体の片腕を犠牲にして相手の動きを止めるという信じられ

ない方法を取った翔に対して葉月はそう呟いた

それと同時に翔はあらかじめ仕掛けておいたプログラムを起動させる

「言っただろう…無理はしないが無茶はするってな…トドメだ！！！」

オメガは背中の大型ブースターを破壊されたブレイブから離れるとシュバルトゲベールを構える

「葉月、しっかり掴まっていろよ。オメガ！！！」

オメガのブースターを全開にして一気にオメガはブレイブとの距離を詰める

「ライトニング！！！」

高速で飛ぶオメガがブレイブとすれ違うと同時にシュバルトゲベールの一閃でブレイブの腕を切り落とす

閃光（ライトニング）の名に相応しいスピードと予測する事の不可能な変則的な動きとすれ違いざまに繰り出されるシュバルトゲベールによる斬撃…それはまさに光の牢獄（ライトニングプリズン）とも言うべき物である

「ラスト！！！」

アグニの砲塔が相手に突き刺さり翔が引き金を引くとオメガライトニングの最後の一撃となる零距離射撃が繰り出され、ブレイブをアグニの光が飲み込んでいく

「忌まわしき過去の亡霊よ…オレの前から…消え去れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

オメガの撃ち出したアグニの高出力のビームの本流の中で…ブレイブは爆発し、残骸へと変わっていた

「これですべて終わった…安らかに眠ってくれ…みんな…。」

翔は爆散したブレイブの残骸と爆破した施設の跡に視線を向けてそう呟く

オメガは最後の一撃でエネルギーを使い果たしフェイズシフトダウンを起し鮮やかなトリコロールカラーから元の色である鋼色に戻る

「ん？　動きが止まった。」

数機のガストと戦闘を続けていた浩平の乗るゲイツは自分が戦っていたガストが動きを止めた事で浩平は決着が着いた事を知る

「…決着…着けたみたいだな…翔。」

トリケロスのビームサーベルと片手に持ったビームサーベルからビームを消してメインカメラをオメガに向けてゲイツはオメガの元に向かう

「……忌まわしき過去か……オレはやっと決着を付けたか…また、最後は翔に頼ったけどな…。」

今の浩平の声はいつもの陽気な様子など感じられないほどに押し殺したものだった

「それにしても…エネルギー切れなんて、オレに感謝してもらわないとな♪」

浩平はゲイツのコックピットの中からオメガに視線を向けて楽しそうにそう言い切った

シャイニングウィング母艦『ホワイトウィング』

シャイニングウィングの母艦『ホワイトウィング』のブリッジに核搭載型のゲイツ『ファイバード』を抱えて宇宙空間に存在する浩平のゲイツからの通信が入り、その映像が映し出されている

『じゃあ、ご協力感謝する。』

浩平の言葉に意地悪な笑みを浮かべて翔は言葉を返す

「それはファイバードの回収の事か？　それとも…。」

『ファイバードが2、残りが8って所だな。』

「そうか。また会おうぜ、浩平。」

『ああ、出来れば味方か戦場以外でな。』

浩平の言葉に翔は楽しそうな笑みを浮かべなおす

「それは依頼人しだいだ。」

翔の言葉を聞くと浩平の通信は切れてそのまま飛び去っていった…

翔は浩平のゲイツを見送ると改めて、ブリッジに集まっているシャイニングウィングのメンバー達に全身を向ける

「それじゃあ、みんなに新しい仲間を紹介する。」

「私は真咲　葉月、みんな、これから、よろしく。」

葉月を加えてシャイニングウィングの新しい形がそこにはあった…

ＰＨＡＳＥ－１１『蒼い刃』（後書き）

次回予告…異聞と正史、二つの時の流れは一つとなり、ここに交わる。激突するＧとＧ（ガンダムガンダム）…。次回、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録『ＳＴＯＲＹ－Ω』　ＰＨＡＳＥ－１２『大天使との開合』！！！
交差する運命、戦い抜けガンダム！！！

MS・MA設定（〜PHASE－11）

『シャイニングウイング』

オメガガンダム［ＧＡＴ－Ｘ０００］
『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』の中で最後に作られたＭＳ（モビルスーツ）、単体で最強の戦闘力を持つ機体と言うのが開発コンセプト。同時期に開発されていた兄弟機［ＧＡＴ-Ｘ１０５］ストライクのストライカーパックの武装、３２０ミリ超高インパルス砲『アグニ』、『コンボウェポンシステム（１２０ミリ対艦バルカン砲、３５０ミリガンランチャー　×２）』、１５．７８メートル対艦刀『シュベルトゲベール』、ビームブーメラン『マイダスメッサー』、ロケットアンカー内臓小型シールド『パンツァーアイゼン』を併せ持つ事で高い戦闘力が発揮できる。
だが、その反面、偏りすぎた二種類の武装を強引に装備されているために非常に扱い難く、コストも掛かるために『アークエンジェル』への配備が見送られ、破棄されていた。そのために最後で作られた機体でありながら［ＧＡＴ－Ｘ０００（トリプル・ゼロ）］と言うナンバーを与えられた。（四話からアグニ用、シュベルトゲベール用の予備バッテリーを背中に装備される様になった）
また、一部の者達からは『ロスト・ゼロ』とも呼ばれている。

武装（標準装備）
頭部７５ミリ対空自動バルカン砲塔システム『イーゲルシュテルン』
３２０ミリ超高インパルス砲『アグニ』
『コンボウェポンシステム（１２０ミリ対艦バルカン砲、３５０ミリガンランチャー×２）』
１５．７８メートル対艦刀『シュベルトゲベール』
ビームブーメラン『マイダスメッサー』

ロケットアンカー内臓小型シールド『パンツァーアイゼン』
『オメガライトニング』

『Ω、最後の名を持つ失われし機体』

ジン高起動型（翔専用機）［ＺＧＭＦ－１０１７Ｒ］
ザフトで生産された量産機『ジン』を『シャイニングウィング』で改良した高起動型のジン、名前は似ているがザフトで生産されているジンハイマニューバに比べると性能の面で劣っていて、ブースターの強化と推進剤を増加されている。また、『シャイニングウィング』が使用している『ジン高起動型』は頭部に搭載されているセンサーを簡略化されて、その分、軽量化がされている。翔専用機は全体が白く塗られていて、ブースターを強化、予備バッテリーを装備されているがその分だけ装甲を軽量化されている…攻撃が直撃した場合のダメージは大きいが翔自身の技術のレベルが高いのでその心配は少ない（第一話のみ登場。第一話では撃墜させられましたけど…）。

武装
重斬刀
７６ｍｍ重突撃銃
（『シャイニングウィング』で使用されているこの機体は任務によって武装が変わるためにこれは基本武装となっている。）

グラップラーデュエルガンダム［ＧＡＴ－Ｘ１０２Ｇ］
地球軍から盗んだ『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』の基本となった機体『デュエル』のデータを元に『シャイニングウィング』のパイロット兼交渉役兼整備員兼技術者『羽柴　翼』が作り出した汎用型

モビルスーツ。近距離用の武装が主体となっていて接近戦、格闘戦を好む炎の性格がこのモビルスーツの性能に現れている。一番基本的な機体のために改良点も少なく性能も他の物と違ってオリジナルのままである。なお…パイロットがシールドも武器として扱うためにここではそれも武装に分類しておく。

武装
標準装備
頭部７５ミリ対空自動バルカン砲塔システム『イーゲルシュテルン』
１７５ミリグレネードランチャー装備５７ミリ高エネルギービームライフル
ビームサーベル
シールド

『爆炎の炎をその身に宿し宇宙（そら）を駆ける赤き闘士』

スナイパーバスターガンダム［ＧＡＴ－Ｘ１０３Ｓ］
地球軍から盗んだ『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』の一機『バスター』のデータを元に『シャイニングウィング』のパイロット兼交渉役兼整備員兼技術者『羽柴　翼』が作り出した遠距離支援用モビルスーツ。接近戦での弱点を押さえるために『アーマーシュナイダー』とビームサーベルを装備させている。またオメガの予備パーツを組み上げて固定武装を３５０ミリガンランチャーから３２０ミリ超高インパルス砲『アグニ』に変更している。

武装
２２０ミリ径６連装ミサイルポッド
３２０ミリ超高インパルス砲『アグニ』
９４ミリ高エネルギー収束火線ライフル

アサルトナイフ『アーマーシュナイダー』
ビームサーベル

『全てを撃ち抜く蒼き狩人』

セイバーイージスガンダム［ＧＡＴ-Ｘ３０３Ｓ］
地球軍から盗んだ『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』の一機『イージス』のデータを元に『シャイニングウィング』のパイロット兼交渉役兼整備員兼技術者『羽柴　翼』が作り出した高機動型モビルスーツ。機動性、スピードを重視されている為に装甲は薄く防御の大半を『ＰＳ装甲』に頼ってしまっている事が最大の弱点となっている。通常のイージスとの外見的な差異はカラーが蒼に変更された事に限定される。

武装
頭部７５ミリ対空自動バルカン砲塔システム『イーゲルシュテルン』
６０ミリ高エネルギービームライフル
ビームサーベル（両手両足のクローに内臓）
シールド

ＭＡ形態時
５８０ミリ複列位相エネルギー砲『スキュラ』
ビームサーベル

『宇宙（そら）を翔ける蒼き音速の流星』

ブリッツガンダムシャドーエッジ［ＧＡＴ－Ｘ２０７ＳＥ］
地球軍から盗んだ『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』の一機『ブリッ

ツ』のデータを元に『シャイニングウィング』のパイロット兼交渉役兼整備員兼技術者『羽柴　翼』が作り出した接近戦用モビルスーツ。パイロットの性格上接近戦が得意だが武装が元で中距離、遠距離にも対応できる。またＰＳ装甲以外にも『ミラージュコロイド』と呼ばれるステルス機能を装備している。通常のブリッツに装備されている『ミラージュコロイド』は攻撃時には姿を現してしまうが翼が改良を加えた物は攻撃時にも姿を消す事が可能になる。その為に長時間使用する事ができないと言う新しい欠点が出てきてしまっている。武装、外見は改良されていないが肩にパイロットである鋼矢のパーソナルマークが書かれている。

武装
右腕：攻盾システム『トリケロス（３連装超高速運動体貫徹弾“ランサーダート”、５０ｍｍ高エネルギービームライフル、ビームサーベル、シールド）』
左腕：ピアサーロック『グレイプニール』
特殊武装
『改良型ミラージュコロイド』：微粒子ガスで機体表面に付着させる事で機体を透明にし、レーダーにも反応しなくする。翼が改良したミラージュコロイドは姿を消したまま攻撃できるが８０分という時間制限が４０分と短くなった事とＰＳ装甲が使用不能になるという欠点がある。

『闇と共に敵を討つ漆黒の電撃』

『ディアボリックフォース』

ディアブロガンダム［ＧＡＴ－Ｘ４０１］
『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』のデータを元にして作られた存在

しないはずの七番目の機体。他の『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』とは違うフレームによって、高い攻撃力を発揮できる。どこで作られたのかも謎の機体。背中にある八枚の翼からは妨害電波、小型のアンチビーム爆雷を発生させる事が出来る。

武装（標準装備）
頭部７５ミリ対空自動バルカン砲塔システム『イーゲルシュテルン』
内蔵型５８０ミリ複列位相エネルギー砲『ニーベルン』
『ビームクロー』×２（両腕に装備）

『全ての命を飲み込む宇宙（そら）の悪鬼』

ファブニールガンダム［ＧＡＴ－Ｘ３０４］
『ＧＡＴ－Ｘナンバーシリーズ』のデータを元に作られた存在しないはずの八番目の機体。イージスと同じタイプのフレームによってＭＡ形態への変形が可能。スピードではイージスに劣るがパワーでは上回っている。ディアブロとの連携を目的にして作られているために単体では遠距離戦での弱点が目立つ。元々武装は少ないためにＭＡに変形しても圧斬鋏『ギガンティック』と内蔵型ビームライフル（ギガンティック内に内臓）は使用可能。

武装（標準装備）
頭部７５ミリ対空自動バルカン砲塔システム『イーゲルシュテルン』
圧斬鋏『ギガンティック』
内蔵型ビームライフル（ギガンティック内に内臓）

『命を食らい尽くす宇宙（そら）の邪竜』

メビウス・ゼロ（アキト専用機）
有線式ガンバレルを装備した高性能ＭＡ。連合のエースパイロット『エンディミリオンの鷹』の異名を持つ『ムゥ・ラ・フラガ』の使用している機体と同一の機体。デーモンナイツに配属された時、ディアボリックフォースの専用カラーである黒に塗られている。モビルスーツであるディアブロ、ファブニールには性能的に劣るがそれでもパイロットの能力と合わせてデーモンナイツの主力の一つである。

武装
大型リニアガン
有線式ガンバレル

『悪魔の騎士の駆る黒き鷹』

『ロートリッター』

シグー（アキラ専用機）
ロートリッターに配備された『ビーム試験型シグー』のパーツでシグーを改造した機体。連合のモビルスーツのデータを元に小型化したビームライフルとビームサーベルを装備している。ラザのクリムゾンシグーと同タイプだが名前の上での変更は無い。アキラのパーソナルカラー『白』に塗られている。

武装
ビームライフル
ビームサーベル×２

ジン・スナイパー
ロートリッターに配備された『ジン強行偵察型』を元に遠距離用に改造されたモビルスーツ。大型の試作型ビームライフルを装備していて、接近戦用の武器は無いがロートリッターの機体の中で最大の射程を持つ。試作型ビームライフルは攻撃力、射程ともに高いが連射が効かない事が欠点となっている。ミクが主に使用していて彼女のパーソナルカラーである『青』に塗られている。

武装
試作型ビームライフル

クリムゾンシグー
ロートリッターに配備された『ビーム試験型シグー』のパーツでノーマルタイプのシグーを元にラザ専用に改造された機体。ビームライフルとビームサーベルを標準装備している。全体的に性能は高められていて、連合のモビルスーツのデータでビームライフルも小型化されている。ザフトのモビルスーツの中でも一、二を争うほど高い性能（ゲイツに匹敵、機体性能ではデュエルを上回る）を持つがラザ以外に乗りこなせる者は少ない。これはロートリッターの中で改造された物なので『クリムゾンシグー』が正規の生産ルートに乗る事は無い。なお…この機体の色はラザのパーソナルカラー。

武装
ビームライフル
ビームサーベル×2

『ザフト（試作機）』

浩平専用ゲイツ（試作機カラー）
浩平を中心とした部隊に回された試作型のゲイツ。本来はロートリッターに渡される予定だったがNジャマーキャンセラー試験型ゲイツ（ファイバード）の回収の任務を引き受ける交換条件として浩平に渡された機体。翔の乗るオメガと協力してモビルガイスト達と戦った。なお武装は補給部隊に紛れ込んだ浩平がクルーゼ隊の補給から盗み出した物を使用している…トリケロスに装備されているランサーダートはその時にすべて使ってしまった…本人曰く『ちっ…新しいモビルスーツを盗もうと思ったが流石はクルーゼ隊、ガードが固いな。ワッハハハ。』らしい…。なおその時の状況は…デュエルを盗み出そうとしてイーザクを気絶させて近くに有ったトリケロスを手にとって出撃したがバスターとイージスの追撃を受けて逃げ切れないと判断した結果、ビームサーベルとトリケロスを自分の機体を隠してある場所に向かって投げた後、デュエルを自分の逃げる方向とは正反対の場所に向かって全速力で飛ばせて逃げ切った…。逃走時の機体がシグーだった事から彼の犯行だという事が判明した…本人に反省の色はまったく存在していない。

武装
ビームサーベル（デュエルの物）×2
攻盾システム『トリケロス（ブリッツの物）』（ビームサーベル、ビームライフル）

Nジャマーキャンセラー試験型ゲイツ（ファイバード）
極秘裏に試験運用されている機体。Nジャマーキャンセラーの試験のために作られた機体でこの機体に装備されている物は不安定となっている。核とNジャマーキャンセラーを使用された初めての機体でデータ収集のための機体なので戦闘能力は無視されているその為に後に開発されたドレッドノート、フリーダム、ジャスティスと言

った機体に比べると遥かに劣る性能しかない…同時に試作型のゲイツのボディーを使用しているためにその実験も兼ねている。正式名称は『Ｎジャマーキャンセラー試験型ゲイツ』ながら…データではコードネーム『ファイバード』と呼ばれている。（ファイバードには『不死鳥』の意味がある。）…なお、武装はビームサーベルが使用されている。

武装
ビームライフル
ビームサーベル×２

『モビルガイスト』

ブレイブ［ＮＭＧ－０１］
モビルガイスト計画の中で作られたクラスター専用のモビルガイスト。格闘戦を得意としている高機動型の機体。両腕にビームクローを装備していて背中には高出力のブースターを装備している。一撃離脱の戦法を得意として後に開発されるガルーダ、ユニコーン、アルフォースの三機との連携はデータ上ほぼ無敵と言う。

アルフォース［ＮＭＧ－０２］
モビルガイスト計画の中で作られたクラスター専用のモビルガイスト。遠距離、近距離での戦闘に対して高いバランスを持っている汎用性の高い機体。大気圏内での飛行も可能としている。

アルファー［ＮＭＧ－０３］
モビルガイスト計画の中で作られる予定だったクラスター専用のモ

ビルガイスト。アルフォースと同じく高い基本性能を持つ汎用性の高い機体。

ガスト［ＭＧ－０４］
モビルガイスト計画の量産機。高いバランス性能を持っていて、パイロットを失ってもブレイブやアルフォースなどの純粋なクラスター専用の機体からの遠隔的な指示で戦闘を続行させる事も可能になっている特殊な機体。頭部は後の連合の量産機『ストライクダガー』に近い物になっている。

ガルーダ［ＮＭＧ－０５］
第二次モビルガイスト計画の中で作られる予定だったクラスター専用のモビルガイスト。ブレイブとのコンビネーションを目的として作られた機体で遠距離攻撃が得意となっている。

ユニコーン［ＮＭＧ－０６］
第二次モビルガイスト計画の中で作られる予定だったクラスター専用のモビルガイスト。アルフォースとのコンビネーションを目的として作られた機体で主にアルフォースの戦闘のサポートを担当、電子機器に異常を発生させるコンピューターウィルスを広く散布させる事が目的の電子戦用モビルスーツ。主にアルフォースがユニコーンを守りその間にユニコーンが敵のシステムを掌握するという戦い方を得意とする。

キャラクター設定（～PHASE－11）

傭兵部隊シャインニングウィング

伊達　翔『ナチュラル』
物語の主人公、『傭兵部隊シャイニングウィング』に所属しているパイロット『白き翼』。遺伝子操作をされていないナチュラルだが操縦技術はナチュラル以上、正式な戦闘訓練は受けている様だがそれがどこで受けたのかは本人が語らないために不明。本人曰く、OS自身に自分が合わせて操縦させているらしいが…事実は不明。搭乗機は『オメガ』
実はクラスターとして幼い頃に強化、訓練を受けた事で現在の能力を手にしていて、ナチュラルでありながら、コーディネイターにも匹敵する能力を持っている。

羽柴　翼『コーディネイター』
『傭兵部隊シャイニングウィング』のパイロット兼交渉役兼整備員兼技術者、元ザフト軍に所属。射撃の能力は高く彼に打ち抜けない物は存在しない。ザフト所属時代は『天空の狩人』と呼ばれていた。それでも、モビルスーツを使っての戦闘は得意としないが作戦の立案や敵の心理を読むことに関しては、ザフト軍で彼の右に出るものはいなかった。搭乗機は『Sバスター』

大道寺　炎『コーディネイター』
『傭兵部隊シャインニングウィング』のパイロット。元ザフト軍で翼と同じ部隊に所属していた。『血のバレンタインの悲劇』によって妹を失っているがその遺体を捜さなかった軍に対しての不信感か

ら脱走。（本来、軍に対して良い感情を持っていなかった翼もこの時、友人である炎と共に脱走）軍に所属していたころは格闘戦を得意とした事から『爆炎の闘士』と呼ばれていた。搭乗機は『Ｇ（グラップラー）デュエル』

風見　クウヤ『コーディネイター』
『傭兵部隊シャイニングウィング』のパイロット。家族の中で彼だけがコーディネイターである事で家族の中は悪く家を出て傭兵になった。以前は一人で行動していて、その技術はザフトからスカウトされるほどの物だったが・・・ある任務で翔と敵、味方に分かれて戦った時に翔に敗れて命を助けられた事から翔に憧れる様になる。彼がザフトに入らなかった理由として彼が心を許している幼馴染の少女『カスミ』がナチュラルである事が最大の理由になっている。搭乗機は『Ｓ（セイバー）イージス』

皇　鋼矢『コーディネイター』
『傭兵部隊シャイニングウィング』のパイロットだが一人で行動する事が多い。基本的に冷酷で他人に対して心を開かないが任務の途中で助けた少女『理奈』に対しては心を許している。基本的に戦闘では接近戦、奇襲を得意としている。搭乗機は『ブリッツＳＥ（シャドーエッジ）』

真咲　葉月『ナチュラル』
『ユニウス７』の近くに存在していた『クラスター』研究所の跡地でコールドスリープさせられていた少女。眠っていたカプセルに『プロトタイプ・クラスター』と言う文字と名前が書かれていたがそれ以外のデータは全てが不明。クラスター編終了後、『シャイニングウィング』の新しいメンバーになる。戦闘能力は翔と同じくナチュラルながら、コーディネイターにも匹敵している。

天王寺　カスミ『ナチュラル』
『傭兵部隊シャイニングウィング』に所属している少女、クウヤの幼なじみで主にクウヤのサポートに回る事が多い。彼がザフトに入らなかった理由でも有る。幼い頃に両親を事故で亡くしていて彼女自身も瓦礫の中に閉じ込められていたために暗闇を嫌う。クウヤが守りたいと願う相手でもある。

琴葉　理奈『ナチュラル』
鋼矢が仕事の途中で助けた少女、明るくめげない性格、輸送機等の操縦が得意で助けられてからは鋼矢のサポートに回る事が多い。実は地球連合軍によって身体能力を無理矢理高められている強化ナチュラル（ブーステッドマン）そのために戦闘は不可能だがモビルスーツの操縦も出来る（それでも、転ばずに歩ける程度のレベル）。他人に対して冷酷な面しか見せない鋼矢が隠している自分の優しさを見せる唯一の相手（それでも、本人以外気が付いていない）。

ザフト特殊部隊デスティニー

風間　浩平『コーディネイター』
ザフト軍の所属しているパイロット、『デスティニー』隊長。血のバレンタインで炎と同じ様に妹を失っているが軍に入ったのはそれが理由ではなく本当の理由は不明…。接近戦、遠距離戦の二つを得意としている。記録では地球軍から奪ったメビウス・ゼロで帰還中に三十機近くのメビウスを撃墜した事がある。明るい性格の持ち主、どこで出会ったのかは不明だが翔とは友人同士…。搭乗機は『ゲイツ（試作機カラー）』
実は彼も『クラスター』研究所にいて実はその場所で妹を失ってい

る。翔とはその研究所で出会った友人…『クラスター』の実験の被験者の中の数少ない生き残りでもある。彼を含めて記録上の生き残りは2人だけ。
なお、部隊名は彼が決めたことで、後の議長のプランとはなんら関係ない。

ザフト特殊部隊『ロートリッター』（ドイツ語で紅騎士の意味）

霧崎　アキラ『コーディネイター』
ザフト軍に所属しているパイロット。血のバレンタインで家族を失っている事から軍に所属する様になった。接近戦、遠距離戦のどちらも得意だが特に接近戦ではザフト軍の中でも彼と同じレベルにあるのはラザだけと言うほどの実力者。唯一、『シャイニングウィング』の『白き翼』…『伊達　翔』が勝てなかった相手（負けてもいないが）。ラザと同じ部隊に所属している。愛機は『シグー』

水月　ミク『コーディネイター』
ザフト軍に所属しているパイロット。アキラと同じ様に血のバレンタインで家族を失っている事から軍に所属しているようになった。アキラとは幼馴染で恋人同士、戦闘時では遠距離からの狙撃を得意としていて、彼が背中を預けられる相手。ラザ、アキトと同じ部隊に所属している。愛機は『ジン・スナイパー』

ラザ＝ランフォード『コーディネイター』
ザフト軍に所属しているパイロット。血の様に紅いモビルスーツを操る事から敵味方から『クリムゾンギルティー（真紅の絶望）』と

恐れられている。年齢は低いがパイロットとしての能力、戦術の立案に関してはあの『ラウ・ル・クルーゼ』と同等の能力を持っているとも言われている。愛機は『クリムゾンシグー』

地球軍特殊部隊ディアボリックフォース

黒田　タツヤ『強化ナチュラル（ブーステッドマン）』
ブルーコスモスで作られた『生体ＣＰＵ計画』の中で偶然に誕生した戦闘能力強化人間の最高傑作。遺伝子操作なくコーディネイター以上の力を持ち、精神も安定している。（彼の誕生は偶然としか呼べない物だった為にそれ以後は彼と同じ存在は誕生していない）独自の目的の為に行動しているが表向きはブルーコスモスの盟主『アズラエル』に忠誠を誓っている為に新型のモビルスーツと特殊部隊『ディアボリックフォース』を与えられた。独自の目的は不明。搭乗機は『ディアブロ』

真田　刃『強化ナチュラル（ブーステッドマン）』
ブルーコスモスで作られた『生体ＣＰＵ計画』の中で偶然に誕生した戦闘能力強化人間。副作用の為に喜怒哀楽の中で哀の感情が欠如しているために戦う事、戦争自体に喜びと楽しみを持っている。タツヤの部隊『ディアボリックフォース』に所属している直属の部下。搭乗機は『ファブニール』

風見　アキト『ナチュラル』
ブルーコスモスに所属しているパイロット。自分の弟であるコーディネイターのクウヤに対する劣等感からコーディネイターを憎み、

ブルーコスモスに所属している。パイロットとしての能力は高く優れたモビルアーマー乗り、数少ない『メビウス・ゼロ』を操る事の出来るパイロットでも有った。愛機は『メビウス・ゼロ』

ＰＨＡＳＥ－１２『大天使との開合』

ザフト軍の襲撃、アークエンジェルとの合流地点を目前にした所で先遣隊の『モントゴメリ』のブリッジは慌しくなった

「Ｎジャマー数値増大！」

「アークエンジェルとの交信が途絶しました！」

「敵艦影を捕捉！　ナスカ級です！」

今、ブリッジで交わされている声は、どれも悲痛なものだった。

「ナスカ級よりモビルスーツの発進を確認！　数五！　ジン四！　それにＸ－３０３『イージス』です！」

「すぐにモビルアーマー隊を出撃させろ！」

モントゴメリ艦長、コープマンが毅然とした態度でクルー達に指示を与える

「奪われた味方機に墜とされる。こんな、バカな事があるか！？」

その隣で、ジョージ・アルスター事務次官は震えていた

そして、戦場において奪われた味方機に墜とされるのはバカな事でもなんでもない、鹵獲した優秀な兵器を使うのは当然の事だ

「アークエンジェルが接近してきます！」

一人のクルーがコープマンに報告する
「くそっ！　通信ができていれば」
「助けに来てくれたのか！」
そのクルーの報告にコープマンとアルスターは対照的な反応をした
「事務次官をライフポッドにお連れしろ！」
「何を！」
突然のコープマンの言葉にアルスターは狼狽する
「アークエンジェルが来たところで、戦況は変わりませんよ。万が一に備えて、事務次官は脱出の用意を。」
「何故だ？　アークエンジェルが来れば、もう大丈夫だろ！」
「横でギャーギャー騒がれていては、生き残れる戦闘も生き残れなくなるんですよ！　さっさと事務次官を連れて行け」
さっきからのアルスターのみっともない姿に辟易していたコープマンは、それだけ言うとアルスターを無視した
何人かのクルーたちが、コープマンの指示通りにアルスターを連れて行った
「『バーナード』、沈黙しました！」

「Ｘ－３０３イージスが『ロー』に向かいます！」

ブリッジに僚艦二隻の状況が報告される、だがそれはどれも悪い報告ばかりだった

イージスのスキュラでその『ロー』が撃沈する様子を戦場に向けて飛ぶ三機のＭＳと一隻の輸送船が確認していた

「地球軍艦二隻が撃破、アークエンジェルの姿は無しか…。…ハルバートン提督からの依頼だから引き受けたが…アークエンジェルと搭載されているＭＳの護衛なんてな…炎が嫌がる訳だな。」

自分の妹の墓を荒らした者達の護衛、彼の妹、それが元でザフトを脱走する事になった炎にしてみればどんな理由があろうとも、その墓を荒らしたアークエンジェルの護衛など出来る物ではなかった、仕方ないとは理解しているがそれで納得できれば戦争などは起こるはずも無い

「翔さん、護衛対象のアークエンジェルが来たみたいです。ストライクと…メビウス・ゼロが出撃しました。」

セイバーイージスからの通信に映るクウヤの表情には『メビウス・ゼロ』…彼の兄の使う物と同じ機体を見て嫌悪が浮んでいた

だが、そのメビウス・ゼロは彼の兄が使った物とは違い通常のオレ

ンジであり、大天使の名を持つ戦艦『アークエンジェル』にある『メビウス・ゼロ』を操る事の出来るパイロットは一人しかいない、『エンデュミオンの鷹』の異名を持つ男『ムウ・ラ・フラガ』ただ一人だ

「全滅したら意味無いんじゃないのか…到着しても？」

戦闘中の映像に視線を向けながらの呟きがブリッツシャドーエッジからの通信を通して、他の二機と『シャイニングウィング』の母艦、『ホワイトウィング』に聞えるとクウヤの冷たい視線が鋼矢に向けられた

「確かに全滅されたら厄介だな、次の標的はアークエンジェル…あの船が沈んだらミッションは失敗だ。」

そこまで言った後、翔はオメガのコックピットからモニターを通してセイバーイージスとブリッツシャドーエッジのコックピットのクウヤと鋼矢の二人に視線を向け、眼で合図を送る

翔の考えを理解したのか、二人が小さく頷くと翔はモニターの映像を二人のコックピットのものからホワイトウィングのブリッジの物へと切り替える

「葉月、オレ達は先に行く。アークエンジェルが撃墜されたらまずいからな。」

『了解、戦闘終了を見計らって私達は合流だね。』

翔の言葉を聞くと葉月はすぐに答える、翔も葉月の言葉に対して小さな笑みを浮かべて答えた

「ああ、分かってるな、葉月。」

『まあね、最近は翔の考える事も分かってきたし。』

翔の言葉に微笑を浮かべて葉月がそう答えるとモニターから映像が消える

「…鋼矢、クウヤ…行くぞ！」

再びモニターに映る二機の機体のコックピットの映像に視線を一度向けると翔は二人の名前を呼び、そう叫んだ

『『了解！！！』』

翔の言葉に二人は同時に答えた

オメガ、セイバーイージス、ブリッツシャドーエッジの三機のＭＳザフトの部隊との戦闘に入ったアークエンジェルに合流するために戦場に向かう、オメガは己の兄弟と出会い、セイバーイージスとブリッシャドーエッジはその元になった機体との戦いが始まる

アークエンジェルから出撃し、先遣隊の援護を開始したストライカーパック・エールを装備したストライクエールストライクとメビ

ウス・ゼロは苦戦を強いられていた

「クソ、どうして、敵じゃなくて味方に邪魔されるんだよ！」

メビウス・ゼロのコックピットの中でムウは叫ぶがそれで事態が好転するはずも無い、メビウスのパイロット達は新米なのかストライクやメビウスの射線軸上に入り、攻撃の邪魔をする…

逆にそれらを気にする必要の無い、敵のジンにとっては好都合だ、弱い獲物が強敵の攻撃から自分達を守る盾になっているような物なのだから、それが敵が戦艦に攻撃を集中し、メビウスの撃墜を控えている理由である

ザフト軍の戦艦『ヴェザリウス』のメインモニターの中で『ロー』がイージスの撃ち出す『スキュラ』の閃光に貫かれ、爆発四散して行く

「そろそろ仕上げかな。アデス！　私も出るぞ。それとモビルスーツ隊にモビルアーマーの撃墜を始めろと打電しろ。」

それだけ言うとザフト軍隊長、仮面の男『ラウ・ル・クルーゼ』は自身の副官『アデス』の返事も待たずにモビルスーツデッキに向かった

だが…事態はその瞬間、変化する

ザフト軍のモビルスーツ、ジンが集まっている地点に突然、ローを撃墜した物と同じ閃光が撃ち込まれ、爆発四散していく

『『『『な！？』』』』

キラ、アスラン、ムウ、クルーゼの驚愕に満ちた叫びが図らずも同一のタイミングで自身の乗る機体のコックピットの中に響く

それも当然だろう、エールストライクと戦っているはずのイージスにのみ装備された武装が別の場所から…それもメビウスではなく、ジンを撃墜したのだから…

「うわ！」

そして、『スキュラ』による、先制攻撃の直後、それとは別に次々と個々にメビウスを追い詰めているジンが突然、何かに切り裂かれる

一瞬だけ、攻撃の瞬間にのみ姿を見せる、その姿は例えるならば戦場に現れる死神にも等しき鋼鉄の亡霊か…鋼の暗殺者か…

「な・・なにが…。」

エールストライクとイージスとの間の空間に割って入る、ビームブーメランが光の軌跡を描き、それはその主の下に戻る

「ス・・ストライク…？」

ソードとランチャーを同時装備したストライクが対艦刀『シュバルトゲベール』を片手に持ち、肩に担ぐような体制で構えて、ストライクを守る様に正面に立つ

それと同時に目の前に現れた機体からの通信が戦場に流れる

『こちら…傭兵部隊『シャイニングウィング』のリーダー…『伊達翔』…。アークエンジェル、ハルバートン提督の依頼により、お前達を援護する。』

ブリッツシャドーエッジ、セイバーイージス、オメガの三機のガンダムの参戦により、戦力差は大きく変化する…一騎当千の実力を見せるＭＡ形態のスピードとＭＳ形態の戦闘力を使い戦うセイバーイージスとミラージュコロイドで姿を消し、現れた瞬間、敵を撃墜する戦い方のブリッツシャドーエッジの前に次々とジンが撃墜されていく

クルーゼの乗るシグーも連合の『エンデュミリオンの鷹』の異名を持つエースパイロットである、ムウのメビウス・ゼロとの戦闘で足止めされていて、エールストライクと戦っていたイージスもオメガの参戦により、二対一にと戦力差は逆転した

「あれは…『オメガ』…破棄されたはずのＧＡＴ－Ｘナンバーの最後の一機がどうして、ここに…？　それにブリッツにイージス…一機しか作られていないはずなのに…。」

アークエンジェルの艦長『マリュー・ラミアス』は戦場の映像を見て、驚愕に染まる…地球軍で破棄されたはずの機体にザフトに奪われたはずのブリッツと色は違うがイージスが味方として戦場に現れたのだから…

「こいつ！！！」

パイロットのアスランの叫び声と共にイージスの撃つビームライフルのビームをある物は回避し、ある物は腕に固定されたアンチビームコーティングの施された小型シールド『パンツァーアイゼン』で防御し、イージスとの距離を詰めていく

「はぁ！！！」

その間合いでは対艦刀では不利と判断したのか、翔は肩のビームブーメランを短剣の様に扱い、イージスのビームライフルの銃身を切り裂くとイージスは爆発するビームライフルを捨て、両腕からビームサーベルを展開し、反撃に出る

「この程度か…これじゃあ、クウヤの方が上だな。」

周囲にエースクラスが多いためにクウヤは『シャイニングウィング』の中で一番弱い様に扱われていて、本人もそれに納得しているが…本来、クウヤはザフトに入れば十分にエースとして、赤服として扱われるほどの実力の持ち主であるが守りたい相手がナチュラルであり、ザフトに行く事は彼にとって、何の意味も持たない、その為に彼は傭兵となる道を選んだ

そして、実力的には傭兵として何度も死線を潜り抜けてきた彼は経験の差でこの時点のアスランより僅かに上といったレベルだろうか…

そして、同じ機体を操るクウヤとの模擬戦で何度かセイバーイージスとの戦闘は経験している為、そして、年齢は若いが歴戦の傭兵で有り、最強のクラスターである、翔は冷静にオメガに対するイージスの攻撃を回避しながら、懐に飛び込みビームブーメランで右腕を切り落とす

本来のビームブーメランではなく、それをビームナイフとして使用する…技術者では考えられない…それは数々の実戦を潜り抜けた兵士や傭兵ならでは発想だろうか…一瞬、反応の遅れたイージスのコックピットの部分を蹴り飛ばす

「つ・・強い…。」

エールストライクのコックピットの中、モニターに映るイージスと戦う、ストライクに似た機体『オメガ』を見てキラは思わずそう呟いた…

オメガの攻撃の前に追い詰められているイージスに対して、オメガはまだ主力とも言えるバックパックに装備された二つの武装…『アグニ』と『シュバルトゲベール』の二つを使っていない

距離的に使えないとも考えられるがパイロットの技量ならば十分にその武装を使用して、倒す事もできるだろう、見ている方には遊んでいる様にも見えるが遊んでいる様子は見られない…それもそのはず…ただ単純に彼は使わないだけだ

（この場で撃墜してもいいが…今の任務はアークエンジェルとストライクの護衛…何があるか分からないからな…。）

翔はイージスに注意を向けながら、オメガのモニターに映るブリッ

ツシャドーエッジとセイバーイージスの二機の戦闘を視界の中に捕らえる

（…メビウスが全滅するのは時間の問題だけどＭＳ戦はこちらが有利だが…地球軍の戦艦は…確実に沈むな…。）

実際、依頼主と護衛の対象が無事ならば戦艦が沈んだ所で翔にしてみればハッキリ言って知ったこっちゃ無い

そこから導き出される答え、彼の考えは一つ…

（奴等の母艦…ザフトのナスカ級高速戦闘艦か…あれに攻撃が行けば向こうも撤退するだろうが…。）

ストライクか自分が向かえばいいとも考えたがすぐに否定する…自分が向かうとすればストライクにイージスの相手を任せるか倒すしかないがそれには手間取るだろう…ストライクに任せた場合、万が一の場合、ストライクが撃墜されてしまうのでそれはダメだ

（…ＭＳ隊が全滅すれば退くだろう…指揮官もバカじゃないだろうからな…。）

能力が優先されるザフトの隊長ならば…彼の友人である、自分もよく知るあの男…自分が知る限り最も性格に問題大有りの『風間　浩平』でもジンが全滅かそれに近い状況まで追い詰められればそう判断すると考える…どうして、浩平がザフトで隊長を続けていられるかは疑問だが…

当然ながら、戦艦とＭＳでは相手にならない…火力では戦艦の方に武が有るがそれはたいした問題でも無い、優れた火力も当たらなけ

れば意味は無く、機動性に優れたＭＳの方が常に優位に立って戦える
ジンが全滅すればブリッツシャドーエッジとセイバーイージスはヴェザリウスに向かう事が出来る、戦艦が撃沈された場合、イージスとシグーは孤立する…それは向こうも望む所では無いだろうから、翔はそう推測した

（念には念を入れるか…予備のパーツも必要だしな…イージスのパイロット…戦闘不能で勘弁してやるよ…。）

そんな事を思いついた翔が変な事を思いついた時に浮かべる、いい笑顔を浮かべてイージスから距離を取るとバックパックに収められた対艦刀『シュバルトゲベール』を抜いた時、翔の予想を大きく上回る自体が起こる

『あんた達！　よく聞きなさい！』

突如、全周波数放送で少女の声が聞こえてきた

（な・・なんだ？）

見ればイージスも動きを止めているので翔も攻撃の手を止める

『今すぐ攻撃を止めて！　でないと…この娘を殺すわ！』

『隊長！』

ムゥの乗るメビウス・ゼロと戦闘を続けていた、シグーの小型モニターに慌てているアデスの顔が映し出された

「どうした？」

クルーゼは攻撃の手を止めて小型モニターに映るアデスと会話を始めた

『ラクス様です。ラクス様が足つきに』

「なるほど。」

アデスの慌て方と『ラクス様』という言葉、先程の少女の言葉、それが示す事は一つだった…それは敵は『ラクス・クライン』を盾にした言う事

「かまうな！　足つき以外に攻撃を仕掛けろ！」

クルーゼの出した指示はアデスの常識を遥かに超えているものだった

『隊長！』

避難する響きのあるアデスの叫び声も気にせずクルーゼは笑みを浮かべて次の言葉を告げる

「人質は生きていなければ意味はない。分かるな、アデス？」

『了解しました…主砲発射用意！　照準は敵戦艦だ。だが足つきには一切攻撃を加えるな。』

クルーゼの命令に忠実に従い、ヴェサリウスは主砲を発射する…直撃を受けたモントゴメリは爆発…撃沈された

「なるほど…あの戦艦では人質として価値の有る人物がいる様だが…人質は生きていなければ意味が無いと言う事か…。」

モントゴメリが撃沈する様を冷静に眺めながら、翔はヴェザリウスの行動からザフトの指揮官はそう判断したと推測した…実際、翔が指揮官の立場でもアークエンジェルは見逃しても最後の一隻は撃墜しているだろう

その時、ブリッツシャドーエッジからオメガに通信が入り、小型モニターに鋼矢の顔が映し出される

『…人質か…オレはあまり、取りたくない戦法だな…。翔、どうする…ジンの方は片付いたが…。』

自分達が勝手に動いて、護衛の対象であるアークエンジェルを危険に晒す訳には行かない、鋼矢はそう考えてリーダーである翔に指示を仰ぐ

「クウヤと母艦にも連絡を頼む…いつでも、行動できる体勢のまま敵に動きがあるまで全員、その場で待機だ。」

『了解。』

鋼矢からの返事が響くと小型モニターの映像が消える

『こちらは、地球連合所属艦アークエンジェル！　当艦は現在、プラント最高評議会議長シーゲル・クラインの令嬢、ラクス・クラインを保護している！　偶発的に救命ポッドを発見し、人道的立場から保護したものであるが以降、当艦へ攻撃が加えられた場合、それは貴艦のラクス・クライン嬢に対する責任放棄と判断し、当方は自由意志でこの件を処理するつもりである事をお伝えする！』

この放送によって、翔達も自体が理解できた…彼等でも知っているザフトの歌姫『ラクス・クライン』が地球軍の戦艦にいる…人質としては役に立つ事、この上無いだろう、政治的、戦術的に有効な切り札を地球軍は手に入れていたのだ

その放送が効いて、ブリッツシャドーエッジとセイバーイージスの攻撃から撃墜されずに残された数機のジンや隊長機のシグー、イージスが引き上げ始めた…だが、これでアークエンジェルへの危機が去った訳ではない

翔はアークエンジェルとの通信を繋げる

「…こちら、傭兵部隊『シャイニングウィング』…ハルバートン提督からの依頼により、第八艦隊との合流まで貴艦を護衛する様に依

頼を受けた…。詳しい事を説明したいから、そちらに着艦する許可を頂きたい。」

『……。分かりました、あなた達の着艦を許可します。』

考えていたのだろう…長い沈黙の後、若い女性の声で応答が帰ってきた

（ザフトの歌姫と地球軍の最新の戦艦とオメガの兄弟のＭＳ…やれやれ…大変な依頼になりそうだな。）

大変と思いながらも、翔の顔には楽しそうな笑みが浮ぶ…彼の直感が告げていたのだ…『楽しい依頼になりそうだ』と…

アークエンジェルとは離れた場所…モントゴメリが有った場所にモントゴメリから射出された救命ポットを回収した二つの黒い影があった…

四対八翼の漆黒の翼を持った悪魔をイメージされる機体と大型のバックパックを背負った機体…バックパックから伸びる鋏にアルスター外務次官の入った救命ポットは捕らえられていた

二機の肩には地球軍の紋章とその特殊部隊『ディアボリックフォース』の紋章が刻まれている事から、その二機が友軍の物だと言う事

はすぐに理解できる

「いや、助かったよ、君達。このまますぐにアークエンジェルと…。」

大型のバックパックを背負った機体『ファブニール』に安心して通信回線を開き、そう指示しようとした瞬間…救命ポットが何かに押しつぶされて軋む音が聞える

「ま・・待て、何を…。わ・・私を誰だと思っているのだ…？」

パイロットが笑みを浮かべている事からそれが自分を回収した機体の行なっている事はすぐに理解し、恐怖に震えながら、そう言った瞬間、もう一機の機体『ディアブロ』からの通信が救命ポットに繋がる

『…アルスター外務次官…オレはあんたが嫌いだ…。』

『フフフ…そうですね…。丁度、ぼく達は安全な檻の外からしか、銃を撃て無い貴方を葬りたいと思っていましたが…まさか、それが、こんな形で実現するとは思いませんでした。』

「や・・止めろ…お前達、私にこんな事をして、タダで済むと思っているか！？」

恐怖に震えながら最後の虚勢を張るがそれは目の前にいる者達に対して、何の役にも立たない

『思っていますよ、それがどうしました？　昔から、よく言うじゃないですか…『死人に口無し』って。上にはザフトのＭＳによって

殺されたと言う事にしますから、どうぞ、ご安心下さい。』

『そう言う事だ…。戦場では誰にも公平に死神が鎌を振り下ろす…。戦いは死神とのダンス…ダンスのマナーを破った者には死神の裁きが訪れるが…、お前はそれ以前だ…踊る資格すらない人間が舞台に立つ物じゃないな…。まあ、この言葉は来世で役立たせてくれ…。』

ファブニールとディアブロ…二機のガンダムのパイロットが笑みを浮かべる

「ま・・待て…。た・・頼む…助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！　何でもする、何でもするから…命だけは…。」

救命ポットの形が変化していく…ファブニールの鋏『ギガンティック』よって、押し潰されているのだ…

『残念ながら、オレはお前を殺したい、気に入らないと思っていたんだよ…助けてやる義理は無いな…。自分で殺せないのが残念だ。』

ディアブロのパイロットは会話を伸ばし、ファブニールのパイロットもすぐには潰れない様に気をつけながら押し潰す…彼等は僅かに希望を与えているのだ…最後の瞬間の恐怖を少しでも大きくする為に…

「た・・頼む…。」

その会話に飽きたのか…気が済んだのか…アルスター外務次官の懇願を無視して、二機のパイロット…ファブニールのパイロット『刃』とデーモンナイツの隊長にして、ディアブロのパイロット『タツヤ』の二人は冷酷に最後の通告を下す

「「それでは…さようなら、アルスター外務次官…。いえ、ジョージ＝アルスター殿…。」」

『うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　…グシャ…』

機械がつぶれる嫌な音がし、『ザー』と言う砂嵐のような音が押し潰した救命ポットをトドメとばかりにギガンティックに内蔵されたビームライフルで消滅させると二機の悪魔は飛び去って行く…

ＰＨＡＳＥ－１２『大天使との開合』（後書き）

次回予告…シャイニングウイングと大天使（アークエンジェル）との出会い、異聞と本道はここに交差する。彼等は出会う。大天使（アークエンジェル）に乗る敵国の歌姫、コーディネイターに父を殺された少女、そして…最高（スーパー）の調整者（コーディネイター）、『キラ＝ヤマト』に。そして、語られるもう一つの翔の過去。

次回…機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ　Ω』、ＰＨＡＳＥ－１３『白き翼、青き騎士』！！！　もう一つの過去、立ち向かえガンダム！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2214b/

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ異聞録　『ＳＴＯＲＹ　Ω』

2010年10月14日12時03分発行